Fate/MugenOrder

ゴミ君

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ｆｇｏでＭＣＳに召喚されてもらいました。ＭＣＳはかわいい。

▼特異点・Ｆから始まります。

▼当作品のＭＣＳは１Ｐ（一番低い性能）から始まります。ご了承ください。

イリヤガチャでメイヴ出たので萎えました

旧題：『Ｆａｔｅ／ＭｉｒｒｏｒＯｒｄｅｒ』

目　次

書きたいネタをごったにしたもの ―― 1
番外編等
マテリアル：Ｍｉｒｒｏｒ　Ｃｕｂｅ　Ｓｑｕａｒｅ ―― 4
マテリアル：Ｌ ―― 8
Ｌと言ったら ―― 11
■■、相手は死ぬ ―― 14
プロローグです
主人公のやらかし ―― 20
特異点・Ｆ　しかくいホワイト立方体
未知との遭遇 ―― 28
それは白くて四角くて ―― 31
Ｌｅｔ’ｓ対話 ―― 35
ＭＣＳ、一体何者なんだ… ―― 40
実力の程は ―― 43
銀の鏡の立方体で出来たアーチャーが、皮装備に（ｒｙ ―― 47
知っている ―― 52
『専用対策』 ―― 57
召喚 ―― 62
１を知る ―― 67
ＭＵＧＥＮを知る ―― 70
幕間　専用悪夢 ―― 74
第一特異点・暗夜百年戦争オルレアン
開幕十割（視界） ―― 78

×2→×1 ―― 81
無謀な探検家 ―― 84

書きたいネタをごったにしたもの

――――――――――２０ＸＸ年　　世界は、終焉の炎に包まれた！

――――――――――命は絶え、星は燃え尽き、ヒトの明日は失われようとしていた…！

――――――――――しかし！アラヤはまだ、諦めていなかった！

〝資源がないなら他所のを慈善活動（タダ働き）させればいいんだ！〟

Ｆａｔｅ／ＭｕｇｅｎＯｒｄｅｒ

〝異次元の住人は皆、恐ろしい力を有している〟

『だーかーら！私はどっからどう見たって角砂糖じゃあーりーませーんー!!』

「伝わってないよＭＣＳ！怒りを表現しないといけない身にもなって！」

「なんだあいつ！いきなり角砂糖に向かって叫びやがった！」

「イカれてんだよ！んなこたいいからさっさと殺るぞ！」

『角砂糖じゃないですってばあああああ!!!』

〝しかし、それを御することができれば人理修復の完遂に大いに貢献するだろう〟

（軽快なＳＥ）

「マスターが２ｍの高さから落ちて死んだ！」
「と思ったら起き上がったぞ！」

（軽快なＳＥ）

「ああ！マスターがエネミーの攻撃で倒れた！」
「と思ったらピンピンしてるぞ！」

（軽快なＳＥ）

「あ〟ぁ〟!!マスターが宝具をモロに食らった！」
「と思ったら無事だ！マスターは生きている！」
「君ら見てないで戦ってくれないかなあ!?」

〝こ、貢献を…〟

『その特異点には謎の粒子が蔓延している！』？ホクト！ウジョウハガンケン！ハーン！テーレッテーフェイタルケーオー／
『その粒子に暴露した英霊は、宝具が勝手に暴発する状態になってしまう…。』？コレデジエンドダ！オーモーイーガーバサラケーオー!!／
『…とにかく！様々な面から考え、我々はその粒子を
超鬼畜粒子

と名付けた！』

〝こうけん…〟

「ん？あの棒人間急に大人しく…な、何だ？頭にサイレンが響い、てっ！」

「っ…対象、は！こちらを指差しているように見えます！音によって動きを阻害する宝具と推測します！ですが対象も動きを止めました、今が好機です！」

「そうだね！ここで決めよう！」

――――――――――かくして、賽は投げられた

〝…頼む相手を、間違えたかもしれない〟

〝…だが、人理修復に失敗は許されない〟

〝人類最後のマスターは、既に成功を義務付けられたのだ〟

〝我々は、もう傍観者でしかない故に〟

――――――――――これは、鏡と共に行く無限へ至る人理修復の旅

番外編等

マテリアル：Ｍｉｒｒｏｒ　Ｃｕｂｅ　Ｓｑｕａｒｅ

名前：Ｍｉｒｒｏｒ　Ｃｕｂｅ　Ｓｑｕａｒｅ（ＭＣＳ）
クラス：アーチャー
身長：一辺２０ｃｍ
体重：４ｋｇ
イメージカラー：白
特技：無し
好きなもの：人間・決闘（命の取り合いを除く）
嫌いなもの：角砂糖
天敵：Ａｎｇｌｅ　Ｄｒａｗ　Ｓｐｈｅｒｅ（ライバル）

略歴
ＭＵＧＥＮ世界と呼ばれる別世界の住人。外見は白い立方体。
特異点・Ｆにて召喚された。
英霊召喚を行った際に詠唱中にくしゃみをしてしまったカルデアのマスターによって空けられた穴からやってきた。
別世界の本体は座に至っているわけではないので、本来は再召喚は不可能となっている。
…のだが、切羽詰まった抑止力の
・本体がここではない世界にいるなら座にいるようなもの
・イレギュラーの処分より人理修復が優先事項
・というより人手が欲しい今は多少の事は目をつぶるべき
・人理修復が完了したら元の世界に帰ってもらえばいい
という強論により、再召喚（というより穴空け）が可能となった。
本体も協力を申し出ているので、戦力の一員として認識されている。
アーチャーの英霊だが、送られた力がＭＣＳの一側面を表すには少なすぎたため、英霊として発揮できる力はまだ弱い。だが、

霊基(本体にもっと力を送ってもらえば)を強化していけば、実力は一流の英霊と比べても遜色のないものになるだろう。
戦いは好きだが命の取り合いは好まない。たとえ相手が殺す気で向かってきたとしても、その人が生きているのなら、ＭＣＳは殺そうとはしない。
が、相手に意思が見られなかったり、致命傷を負っても大丈夫だったりすると結構容赦ない。やっぱり戦いには全力で臨みたい。

性格
人が好きだが、オルガマリーに不気味がられたのを気にしていること、今までコミュニケーションの取り方が限定されていたことから人との距離の掴み方をいまいち把握できていない。
寂しがりやで、自分に優しくしてくれるような相手をすぐに信用してしまう程純粋。
感情が分かりやすく、嬉しいときはあちこちを跳ね回り、落ち込んでいるときは沈み込んでいる。
発音器官がないのでずっと会話が出来なかったが、念話で会話ができるようになって喜んでいて、積極的に誰かと話そうとする。
会話では誰に対しても丁寧語を使う。

基本ステータス
筋力：Ｄ
耐久：ＥＸ
敏捷：Ｅ
魔力：Ｂ
幸運：Ｃ
クラススキル
単独行動：Ｂ
魔力の補給無しにある程度活動を可能にするスキル。
戦わなければ三日は平気。
神性：Ｅ

英霊の神格を表すスキル。本来ＭＣＳに神格はないが、もとの世界の住人に神として認識されていたことが多かったため取得された。

固有スキル

反転：Ｂ

物事の因果を逆転させる能力。ＭＣＳの場合、自身の負うダメージのみに適応される。受けた攻撃によって傷を癒せるが、攻撃を受けないと生命力が削れていき、最後には霊基の維持が不可能になってしまう。

攻撃を受けたとき、攻撃をしているときに自動的に発動する。

ＭＣＳが味方だと思っている存在からの攻撃は、害意が込められていない場合、反転の発動を狙っての攻撃に限り無効化され、それ以外なら反転が発動する。

生成：Ｃ

物質を魔力から生成する能力。ＭＣＳがアーチャーに分類された要因。

特定の物を生成するのに必要な魔力はとても少なく、欠片サイズの刃、細いレーザー、攻撃をはね返す板の三つがそれに該当する。

それ以外は消費が大きいため、生成することはほとんどないと言っていい。

同時に複数個生成可能だが、制御は全てＭＣＳが行っている。特定数以上生成してもコントロールできないから、程々にしないと魔力の無駄。

宝具

□□□：Ｄ（対精神宝具　１人～２人）

ＭＣＳの記憶や想いを対象に見せる宝具。相手の戦意を喪失させるような光景を見せたり、自然風景によってリラックスさせたり等、色々な用途で使用できる。

景色を見せると、対象は『その場所にいる』と誤認する。
本来は違う効果を持つが、真名を隠して使用しているため効果が異なる。

メタな話をするとゲージ技。１Ｐのそれは上位カラーと違って即死じゃない。
製作者：ヤンマー氏
オマケ

もし普通に召喚されたらこう言う。
『サーヴァント、アーチャー。Ｍｉｒｒｏｒ　Ｃｕｂｅ　Ｓｑｕａｒｅと申します。長ければ、ＭＣＳとお呼びください、よろしくお願いします。

え？角砂糖の英霊なのか、ですか？あはははち・が・い・ま・す!!』

マテリアル：L

＊Lと言ったら　＊■■、相手は死ぬ　より

名前：L霊夢

クラス：キャスター

身長：153cm

体重：内緒です

属性：善・混沌（博麗霊夢）

イメージカラー：灰色

特技：人に誇れるようなものは何も

好きなもの：お話し

嫌いなもの：別れ

天敵：観音

略歴

MUGEN世界の住人。外見は灰色の特徴的な巫女服を着て、灰色の大きなリボンを頭に付けた肌まで灰色の少女。

キャスターのクラスだが、そのままでは世界に深刻な影響を及ぼすと考えた抑止力によってバーサーカーのクラススキルも保持している。すなわち二重召喚である。

最強の矛の持ち主としての側面と、その矛先を己に向ける狂人としての側面を有する。

宝具の他に戦闘手段を持っておらず、基本ステータスは一般人と大差ない上に、宝具を使用すると自壊してしまう。

結果、よほどのことがない限りはカルデア内に留まることとなった。

本来はランサーのクラスになるのだが、ランサーは三騎士のため二重召喚が適用できないので見た目的にキャスターになった。

え？

何でランサーなのか、ですか？

最強の『矛』の持ち主だから…だ、そうですよ？

性格

穏やかな気性の持ち主で、誰に対しても優しく接する。怒るときは怒るが、怒らせた行動を諭す程度で本気で激怒した姿を誰も見ない。

『怒らせちゃいけない人』とはＭＣＳの言葉。

話好きだが自分から人を誘わず、話し掛けられるのを待ち続ける。が、一度話し始めると止まらない。終わりたいと言えば解放してくれるが、彼女の話したいという雰囲気がそれを中々させてくれず、別れの時に見せる悲しげな表情を知ってしまうと尚更言いづらくなる。

話し上手で聞き上手。出される茶菓子も美味なので終わり時が分からなくなる。

基本ステータス

筋力：Ｅ

敏捷：Ｅ

耐久：Ｅ

魔力：Ｅ

幸運：Ｅ

クラススキル

道具作成：Ｃ

魔力的な物品を作る適性。お守りを早く作れる。

陣地作成：Ｅ

自分に有利な魔術工房を作る適性。全く無い。

狂化：ＥＸ

理性を代償に力を得るスキル。理性は奪われていないが、攻撃をしたとき自分も攻撃してしまう。

本人曰く、「手元が狂う感じ」とのこと。
また、狂化によるステータス強化が無い。

固有スキル
千里眼（命）：Ｄ
目の良さを表すスキル。Ｌ霊夢の場合、２００ｍ先まで見える他に対象が生きているか否かの判別が可能。

二重召喚：ＥＸ
二つのクラス別スキルを保有できる。召喚の際に特殊な条件付けが必要。抑止力によるもののため規格外となる。

宝具
最強（直）の諸刃の矛（死）：ＥＸ（対命宝具　１人～２人）
Ｌ霊夢の持つ唯一つの攻撃手段であり、最強の矛。
対象を見ながら気合いを込めると相手が死に、狂化の影響でＬ霊夢も死ぬ。何故対象が死ぬのかは不明で、本人もいつの間にか出来ていたと語っている。
ＭＣＳすら即死させる凶悪な宝具、取り扱いには注意が必要。
Ｌ霊夢が生きていると認識した相手にのみ効果が発揮される。
使用すると空腹感に襲われるのだが、Ｌ霊夢が死んでしまっているため何故かマスターが空腹を肩代わりすることになる。
この空腹感が尋常ではなく、意識を保つのも難しいレベルなので宝具の使用は許可されない。

製作者：ｄｒａｂ氏

Ｌと言ったら

召喚サークルに石を捧げる。何度目か忘れるぐらいの英霊召喚。やっぱり初めて会う人、それも英雄との出会いの瞬間は緊張する。

気難しい人だったらどうしよう、とか、特異点で敵だった人だったら気まずいよな、とか色々考えはするけど、今のところは英霊全員と仲良くやれてる。だから今回も大丈夫だ…多分、きっと。

そんな事を思っている間に召喚サークルからほとばしる三つの光の輪が強い輝きを放つ。

そして、現れたのは――――

「サーヴァント、キャスター。Ｌ霊夢、と申します。アルファベットのＬに、おばけの夢で霊夢。非力な身ではありますが、よろしくお願いしますね」

現れたのは、灰色の巫女さんだった。

「Ｌ霊夢さん、初めまして。藤丸立夏と言います。

早速で悪いんですが、あなたはＭＵＧＥＮの人ですか？」

最初に、これだけは聞いておかないといけない。ＭＵＧＥＮと呼ばれる世界の住人とは、まだ特異点で会った数人としか交流がない。

だけど、その数人だけでＭＵＧＥＮとやらがろくな所じゃないことはよーく分かった。戦闘狂なだけならまだいいのに、何でああもおかしい人ばっかりなんだ。目の前の巫女さんはおしとやかなイメージを抱かせる。きっと、この世界の英霊だろう…

「はい、そうですよ？」

溜めもせずに肯定の返事をいただいた。

あっ、そうでしたか…

いや、まだだ。まだＭＣＳみたいにまともな人の可能性がある。雰囲気とか正にいい人のそれだし。とりあえず話そう。俺は、Ｌ霊夢と

いう名前の巫女さんに食堂で話そうと提案した。

ところで、Ｌ霊夢のＬってなんだろう？

テーブルに座って向かい合う。色々聞きたい事があるけど、何から聞くか。そう考えていると、

「私はね？」

と、Ｌ霊夢さんから話しかけてきてくれた。ありがたいです。

「確かに、ＭＵＧＥＮの住人だけど、別に戦いが大好きってわけじゃないんです。ただ、私がいられる場所があそこなだけで…」

そう言いながら伏し目になる。居場所がない、って事か？確かに灰色の人なんて見ないけど、それだけでイジメたりするものかな…

「私には、生まれつき持っている力があってね？それが、私がＭＵＧＥＮの住人である理由なんです…。」

ぽつぽつと零して、俯いていく。力…言ってて辛そうだし、聞いてるこっちも辛くなってくる。

…ってか！何で最初にこんな話をするんですか！暗い過去とかは後から教えてくれれば大丈夫だから！

「Ｌ霊夢さん。話すのが辛かったら無理に話さなくてもいいですよ。話せると思った時に、教えてくれれば大丈夫です。

ところで、その服って巫女さんですよね？でも、何で頭にリボン付けてるんですか？」

「え？あぁー…、うん。和洋折衷、って言うのかしら？それですよ、それ。リボンって、かわいいでしょう？」

少し大げさに聞いた。Ｌ霊夢さんは顔を上げると、苦笑いしながら答えてくれた。確かにリボンはかわいい。Ｌ霊夢さんのかわいさも相まってすごくかわいい。

よし。次だ。

「Ｌ霊夢さんって日本人ですよね？Ｌって何ですか？名字みたいな？」

「あっ。
ええっと、名字ではないですね。称号？みたいなものです」
「へえー、どんな意味なんですか？」
「それは…ｌｏｏｋ。
そう！見るって意味！」
嘘だ。自分の名字に悩むなんて絶対に嘘だ。でも、見る霊夢さんか。何か面白い。もうｌｏｏｋでいいや。言いたくないなら言わなくても大丈夫って言っちゃったしな。
そう思ってると、向こうからＭＣＳがやってきた。ちょうどいい、ＭＣＳも混ぜて三人で話そう。
椅子から立ち上がって、ＭＣＳを誘おうと声をかけに行った。

■■、相手は死ぬ

俺は今、訓練室の隅っこで倒れている。起き上がる事も出来ず、かろうじて顔を上げると、ＭＣＳとＬ霊夢さんが消えかかっていた。

『うぅ、だから嫌だったのに…』

「あらら…心臓が痛いですね」

どうして、こんな事になったんだっけ？確か、Ｌ霊夢さんと話してるときにＭＣＳが来て…

ふよふよしているＭＣＳを呼び止める。ＭＣＳはこっちに気付くとすぐに近寄ってきたけど、Ｌ霊夢さんを見ると急に固まった。

『り、立夏さん？その人は、まさか…』

声を震わせながら聞いてくる。きっと、ＭＵＧＥＮの人同士知り合いで、久しぶりに会えて喜んでるんだ。多分。

だったら、教えてあげないとね。

「うん、知り合いだと思うけど、この人はＬ霊夢さん。ＭＣＳと同じＭＵＧＥＮのひと『あー！申し訳ないですが急用を思い出しました!!失礼します！』

俺がの言葉に割り込むようにそう言うと、ＭＣＳは来た道を引き返していってしまった。そこまで速くないのがご愛嬌…っと、

Ｌ霊夢さんに不思議そうな目で見られてる。まあ、そりゃそうだよね。事情を知らない人から見たら、俺はいきなり立方体に話しかけた変人だ。ＭＣＳは喋れる相手がいなかったって言ってたし、このままじゃＬ霊夢さんに変な人と思われてしまう。

「あー、Ｌ霊夢さん、違うんです。念話っていうテレパシーみたいなのがありまして、それでＭＣＳと話せるんです。俺以外は話せないの

で、いつもはＭＣＳの通訳をしてるんですよ」
　流石に変人扱いは傷付くので、慌てて事情を話す。そうしたら、Ｌ霊夢さんは合点がいったというように手を叩いた。
「なるほど。ＭＣＳさんはお話しできるようになったのね」
「そうですね、よく話し相手になってます。ひいきしすぎだ！って英霊の人達からは言われちゃってますが」
　笑いながら言葉を返して、ついでにＭＣＳとはどんな仲だったのかを聞いた。遊び友達ではあるけど、遊ぶときに所在が分からないことが多くて大変だったらしい。
「あっそうだ。
　せっかくお話できるなら、ＭＣＳさんに私が戦ってほしいって言ってた、って伝えてもらってもいいですか？」
　唐突にそんな事を言ってきた。戦いは苦手だと言っていたのに、なんで、と聞くより早く、続けてこう言った。
「立夏さんに私の戦い方を見てほしいんです。まだ話さなくてもいいって言ってくれたけど、あらかじめ知っておかないと、後悔しますから」
　寂しく笑うＬ霊夢さんに返す言葉を見つけられなかった俺は、なんで闘う相手がＭＣＳなのかぐらいしか聞けなかった。
「ＭＣＳさんの能力は知っていますよね？それなら、わたしの力がどれくらい異端のものなのかを知っていただけると思って」
　そう言われて、俺にはもうＭＣＳに戦ってくれるように頼むぐらいしか出来なかった。
　ＭＣＳは頼みの内容を聞いて、『え〜っ』と濁った声を漏らしたが、珍しく本当に嫌そうにしながらも引き受けてくれた。後で埋め合わせしておいた方がいいと思いつつ、３０分後に訓練室で待っているという伝言をＬ霊夢さんに伝える。

…これでＬ霊夢さんの何を知ろうとも、俺はＬ霊夢さんと別れたくはない。反英霊と呼ばれる人達だって根っからの悪人じゃないんだ。少し話した程度で何が分かるのかとは思うが、いい人そうなＬ霊夢さんに特異な能力を持ってるってだけで嫌な目を向けたりはしたくない。

訓練室に向かって歩き出したはいいが、道が分からないせいで恥ずかしそうに道を訪ねているＬ霊夢さんの背中を見つめながら、そんな事を考えていた。

「では、早速始めましょうか。

どうぞ、構えてください」

訓練室の真ん中で、そう言っているＬ霊夢は正座したまま立ち上がろうとしない。それに対して警戒すらしない、というよりは諦めているような感じがするＭＣＳの様子も相まって、隅っこで見守っている立夏はやる気がないのかと困惑している。

『構えろ、と言われても…どうせすぐに終わりますし』

ＭＣＳは少し不貞腐れながら返事をした。言葉をＬ霊夢さんに伝えると、申し訳なさそうに苦笑いした。

自分だけ蚊帳の外にいる気分だ。

何が起こるんだ？なんで戦うって言っておいて二人とも構えないんだ？ＭＣＳは何を諦めてるんだ？

何一つ分からないまま状況が進んでいることを、少しだけ悔しく思う。

「ごめんなさいね…でも、これが終われば私はきっとここからいなくなるので、一度だけのワガママだと思って受けてください」

『え？それって、どういう「じゃあ、行きますよ？

立夏さん。短い間でしたが、ありがとうございました」

聞こえていないハズなのに、ＭＣＳの問いを拒むように喋った。そ

して俺に別れを告げる。そんなこと言わないでくれ。まだ会ったばかりで、全然L霊夢さんと仲良くなれてないのに、別れるつもりなんてな

強く、目を見開いた。L霊夢さんのしたことはただそれだけで、他には何も起こらなかった。

なのに、MCSの輪郭はぼやけて、今にも消えそうになっている。

ちょっと待て。一応戦闘の宣言はしていたし、確かに反転は効いていたかもしれない。でも、こんなに早かったか?まだ10分も経っていないハズだ。驚きを隠せないでいると、L霊夢さんが俺の疑問に答えた。

「…これが、私の力です。殺すだけの力。相手の事情を無視して死を付する呪い。

〝直死〟。そう呼ばれています」

L霊夢さんが力について語ってくれていたみたいだけど、俺は少しも聞けていなかった。何故なら、

ぐぎゅるぐおぐごげぐぐ〜

…自分の腹の音がうるさくて聞こえなかったのと、空腹感で意識がもうろうとしているからだ。思わず倒れこんで腹を抱える。こんなタイミングに申し訳ないけど、いきなり腹が空いたんだ。本当に申し訳…

あれ?これヤバくない?人生で初めて、腹ペコで死にそうだと思ってるんだけど。あ、涙出てきた。鼻水も出てきた。歯が震えてるし腹もまだ鳴ってる。どうしよう、L霊夢さんに助けを呼んできてもらわなきゃ…ってええ!?

立夏が見たのは、ＭＣＳと同じく何故か消えそうになっているＬ霊夢の姿だった。
ここで冒頭に戻り、立夏は擦り切れそうな意識の中で、自分の人生を振り返り、特異点で出会った人たちの顔を思い出した。これって、死ぬ前に見る走馬灯ってやつなのか。
そんな感想とともに、意識を手放した。

土下座しているＬ霊夢さんの灰色の背中が、目を覚まして栄養剤をガブ飲みしてから見た最初の光景だった。

訓練室の映像を見たロマニに、説明を得るために再召喚されたＬ霊夢さんは、自分の能力のすべてを話した。
自分が死んだ理由については、

「何て言うか、こう…手元がおかしくなっちゃったんですよ…」
と、自分でもよく分かっていないらしい。ロマニが色々調べた結果、二重召喚というスキルを保有していることが判明した。このスキルでバーサーカーの持つ狂化を取得していたようだ。その割りにはステータスが全部Ｅだけど。

ＭＣＳはどうやら即死だったらしく、Ｌ霊夢さんと一緒に再召喚されていた。直死とかいう謎パワーについても知っていたみたいで、無理矢理引き合わせて悪いことをしたと思う。今度磨いてあげないとな。

それで、なんで俺が空腹でぶっ倒れたのかというと、その原因はＬ霊夢さんの直死にあるとのことだ。
元々Ｌ霊夢さんは直死を使うと腹が空くらしいのだが、Ｌ霊夢さんが死んでいなくなっているので、マスターの俺がその空腹感を肩代わりすることになったのかもしれないとのことだ。よくわからない。

Ｌ霊夢さんは自分を退去させるように言ったけど、別に問題ないと思う。命やら何やらの危機なんて結局特異点でよく感じるし、直死を自分から使おうとも思ってないみたいだし大丈夫だろう。
軽はずみだと言われたけど、直死を使う気なのかと聞いたら黙りこんだ。反論も無いみたいだしカルデアにいてもいいと思う。

といっても、もうあんな空腹感は味わいたくないから、基本的に戦闘はさせられないけどね。

プロローグです
主人公のやらかし

「――――――告げる」

燃える廃墟の中。

炎が爆ぜる音に混じり、二つの声が響く。片方は女の声で、それは迷いなく言葉を紡いでいるが、もう一つの少し遅れて聞こえてくる男の声は、たどたどしく、照れの混じった声で言葉を発していた。

声が重ねる言葉は、日常生活の中で使われる事はほとんど無いようなものばかりで、それが彼らがただ者ではないこと、あるいは変人の集まりだということを表していた。

男の声の主、藤丸立夏は平和を満喫する日本人で、せっかくの夏休みを家でだらだら過ごすような、そんなどこにでもいる男子高校生だった。

それが、なんで燃える街並みの中で声を張り上げて、意味も分かっていないメモを朗読しているのか。

事の発端は、彼に向けて送られた、ある一枚の手紙だった。

俺は、『人理継続保障機関カルデア』なる、なんだかえらい人がたくさんいそうなところからの手紙を両親と一緒に強視していた。書いてあることがほとんど難しすぎて分からなかったが、俺にそのカルデアとやらに来てほしいというのは理解できた。

でも、俺はカルデアなんて聞いたこともないし、夏休みはぐーたらすると決めたからバイトの応募もしていない。つまり、こんな手紙が来るのはありえないんだ。

そもそも、カルデアとやらがどこにあるのかも書かれていなくて、空港で職員に手紙を渡せばいいとか怪しすぎる。
正直無視して済ませたかったけど、バイト代らしい、バイト代とは思えないぐらいに0が付いた数字と、旅費全額負担という文字を見た両親、特に母親がそれを許してくれなかった。

母は言った。金に目が眩んだような、満面の笑みで。

「夏休みの間だけ行ってみたらいいじゃない！ほら、社会経験だと思えば！」

父は言った。たった一言、とても威厳の込められた声で。

「お土産、期待してるぞ」

お母さん、年内には帰れそうにありません。
お父さん、お土産は話だけで我慢してください、しろ。

「…誓いを此処に。」
着いてからいくつか、カルデアに対して言いたいことができた。

ひとつめ、手紙に防寒着必須って書かなかったの絶対に許さないからな。
ふたつめ、所長も先輩呼びしてくれた後輩ちゃんも可愛すぎだろ最高かよ。
みっつめ、魔術はともかく、エイレイとか特異点とか言われても俺にはさっぱりだけど、残念な物を見る目で見ないでほしい。

所長には話が難しかったから寝てしまってぶたれたし、後輩ちゃんには、多分変な笑顔で近寄っていたんだろうな。割り込んできた白い

リスみたいなのに顔を蹴られてしまった。両頬が赤くなっちったけど、どっちも自業自得だからしょうがない。
所長に引っ込んでいろ的な事を言われたので割り当てられた部屋に入ると、部屋の中には幸せそうにアイスを食べている、白衣を着たポニテ男がいた。

その人はロマニという名前で、医者をやっているそうだ。
俺の部屋でサボっていた事を謝ってきたけど、そんなことより、紫だったりオレンジだったり若いのに白髪だったりと、色々な髪の色の人がいることが気になった。
それを聞いてみたら、ここには世界各国から優秀な人がたくさん集まってきてるから、髪の色が珍しい人がいても不思議じゃないと答えられた。
その後も、後輩ちゃんかわいいよね、とか、所長気が強いけどちゃんと友達いるのかな、とか色々話していた。

「「我は常世総ての善と成る者」」

それは突然だった。

救急車に付いてるようなランプが視界を真っ赤に染めた。それと同時に警報がけたたましく鳴り響いて耳をつんざく。
どこかで何かがあったらしく、ロマニさんが安全な場所に避難をさせるから付いてきてと言ってきたが、俺は何故だか、後輩ちゃんがひどい目に遭っているような気がして、いてもたってもいられずに部屋を飛び出して所長がスピーチをしていた場所へ駆け出した。

その部屋は、さっき見た記憶の中の部屋とは変わり果てていた。炎が部屋の中を侵し尽くして、落ちてきた瓦礫は骨組みが剥き出しで見るも無惨な姿になっている。
こんな状態じゃ、誰も生き残れてないんじゃないか、今からでも逃

げるべきじゃないか。そんな考えを断ち切って後輩ちゃんを探す。名前を大声で呼び続けながら。

いた、瓦礫の下に。

頭から血を流している。ぼんやりと遠くを見つめたその目には何も映っていなくて。

何もかも諦めて、ただただ死を待ってるようなその様が、とても我慢できるようなものじゃなかった。

諦めるなと叫びながら駆け寄って、瓦礫から抜け出させようと腕を引っ張る。遠目が帰ってきたけど、その顔が苦しそうにゆがんだし、ちっとも動きそうにないから断念する。

それならと瓦礫をどかそうと押してみたけど、重すぎてやっぱりちっとも動かない。

後輩ちゃんが悲しそうにこっちを見た。なさけない。助けに来たのに、助けられない挙げ句に悲しませるなんて。

多分もうすぐここは崩れる。そうしたらきっと俺も死ぬ。

死ぬのは怖いけど、それは後輩ちゃんだって同じハズだ。俺には何も出来なかったけど、せめて後輩ちゃんが怖がらずに逝けるようにと、彼女の手を握った。

光が視界を埋め尽くす。眩しくて思わず目を閉じた時、レイシフトという言葉が聞こえた気がした。

目を開けたらやっぱり瓦礫まみれだったけど、天井が無くなって、地面がコンクリに変わっていた。

訳も分からずに歩いていたら、人影が見えたので近付いていった。

…結構近くまで来たのに、未だに輪郭しか見えない。それを不思議

に思っていると、その人影が振り向いた。

真っ黒だった。顔も体も、全部が全部。

怖くなって逃げ出したのは間違いじゃなかった。いつの間にか手に持っていた鎖の付いた鎌を、俺を追い掛けて振り回してきたからだ。

人を殺せる道具と一緒にぶつけられた初めての感情に、俺は身体中が冷えていくのを感じた。なのに心と頭は燃えるように熱くなっていて、近付いてくる死から逃げろと全細胞に命令した。

逃げた、不格好に。逃げた、顔を涙やらでぐちゃぐちゃにしながら。逃げた、振り向かずに。逃げた、後ろから聞こえる足音が近付いてくる。逃げて、逃げて、逃げて…足元の瓦礫に気付かずに、足を引っかけた。

勢いよく前のめりに倒れる。必死に起き上がろうとして、逆に時間をかけてしまう。なんとか半身だけ起き上がって、ふと振り向いた。そうしたら、

自分の顔を狙って投げただろう、鋭い金属が光るのが見えた。

――ガギッ!!

その音があの金属が弾かれた音だと分かったのは、目の前に大きな何かを構えた、見覚えのある後ろ姿があったからだった。

「先輩!・無事ですか!?」

ああ、そしてこの声。それに自分を先輩と呼ぶ。間違いない。

そこには、血まみれで動けそうになかったハズの後輩ちゃん――マシュちゃんが立っていた。

…何でか知らないけど、男の欲望が詰め込まれたような、露出の多い服を着て。

マシュちゃんが黒い人（シャドウサーバント？）を殴り飛ばしてから、現状確認をした。

まず、なんでいつの間にか外にいるのか。

ここは特異点という場所で、レイシフトという技術を使って来たらしい。詳しく知らなくても今は困らないとのことだ。

次に、さっきまでボロボロだったマシュちゃんが元気になってることとか、あんなに重そうな盾を振り回せる理由を聞いた。

レイシフトの時に誰かに助けてもらって、一緒に力を授かったのは分かってるけど、名前を聞けなかったとのことだ。帰ったらマシュを助けてくれたお礼をしないと。

最後にどうやったら帰れるかを聞くと、ここには聖杯という凄いものがあるから、それを回収しないといけないらしい。

じゃあどこにあるのかと聞くと黙ってしまったから、地道に探すしかないんだと察した。

あと、何故かマシュちゃんがちゃん付けじゃなくて、呼び捨てで呼んでほしいと言ってきた。顔が真っ赤だったけど、周りが火だらけだから暑いのかな。無理はしないでほしい。

「　我は常世総ての悪を敷く者」

それからは色々あった。

さっきとは違うシャドウサーヴァント（マシュに訂正された）に追われてる所長――――オルガ所長を見つけたり、クーフーリンさんという、青髪の杖を持った現地の英霊（所長から教わった）と遭遇して、

協力関係になったりした。

クーフーリンさんと同じように、シャドウサーヴァントになってない弓を持った人は手強かったけど、何とか勝つことができた。

「このままじゃ、俺たちアイツには勝てないぜ」

そう言ったクーフーリンさんの顔は、戦っているときのように真剣だった。この先に待ち構える英霊、騎士王はとても強力で、自分とマシュだけじゃ押しきられてしまうだろうとのことだ。せめてランサーだったらと嘆いているが、杖を相手に突き刺せる時点で魔術師よりではないと思う。

それはそれとして、勝ち目がないならどうすればいいんだ。そう訊ねると、クーフーリンさんは身を乗り出して、

「決まってるだろ?英霊召喚だよ」

そう答えた。

「「汝三大の言霊を纏う七天」」

「セイバーかランサーが理想的だが、この際前衛なら何でもいい。任せたぜ?」

そう言うクーフーリンさんが、ランサーの部分を強調してたのは、きっと自分だけは呼ぶなということだと思う。もしそうなっちゃったら気まずいしな。

所長が常備してたメモの文章も、次で最後だ。何回か噛みそうになったから、もうさっさと読み終わりたい。

思えば今日は濃い日だった。生まれて初めて海外に来て、珍しい色の髪の人と会ったり、死にそうな目に遭ったりもした。絶対にこの日は忘れられないだろうと苦笑いしつつ、最後の一節を読み上げる。

――思えばそれは必然だったのかもしれない。猛暑に溶けかけていたのに、雪山の中にそびえるカルデアを、防寒着も着ずに訪れた。かと思えば、炎だらけの特異点の中で。熱すぎて炎から離れると、妙に肌寒く感じた。

夏はクーラー、冬は暖房が相棒の日本人、立夏にとってその温度差は殺人的だった。故に――

「抑止の輪より来たれ、天秤、の、ま、もり、どうえぇいッッくしゅあ!!」

――俺は、俺は悪くない。

藤丸立夏は、正常ではないと分かるような、あらぶる光を前に、そんなことを思うのだった。

特異点・F　しかくいホワイト立方体

未知との遭遇

穴が空いている。それも、壁や地面等ではなく空間に。

知り合いの魔法使いが話していた。あれに近づくと、力を吸われて、とても消耗させられてしまうらしい。

塞ぎ方も聞いている。穴が無くなるまで、力を注ぎ続ければいいらしい。

こんな危ないものは放置していてはいけない。早速穴に近づいて、力を注いだ。

暫くすると、穴が少しずつ小さくなっていって、最後には無くなった。

それを見届けて、消費した力を補充するために休憩することにした。

・・・人が恋しいなぁ

「何やってるのあなた！よりにもよって詠唱の途中にくしゃみするなんて！」

待ってくれ所長、寒かった、寒かったんだよ。雪山に人を呼び出しておいて防寒着もくれなかったあなたたちにも責任はあると思うんだ。

いや、でもこんな大失敗も、年末ぐらいにはきっと笑い話とかになってるんだろうな。マシュと一緒のこたつかぁ…

現実逃避をしまくることで自分の失敗から逃れようと思ったが、召喚サークルが物凄い音を立てたので失敗してしまった。なにアレ、大怪獣でも出てくるんじゃないの？クーフーリンさんに聞いてみると、

「さあな。詠唱を失敗するヤツなんて今までいなかっただろうからよ、鬼や蛇ならまだマシだろうよ」
と言われてしまった。でもクーフーリンさんは、呆れるような視線をこちらに投げつつ、杖の先を召喚サークルに向けている。ピリピリした雰囲気がここまで飛んできて、自分が大きい失敗をしたのを理解した。
クーフーリンさんの様子をじっと見ていると、マシュが目の前に躍り出てきた。守ろうとしてくれるのだろうか、失敗したのは俺なんだから見捨ててしまってもいいのに。ありがとう、ありがとうマシュ。でも、
「マシュ！盾！盾がないんだから下がって！」
召喚のために必要だと所長が言っていたので、マシュの盾を借りていた。おかげで盾は召喚サークルの中だ。
「大丈夫です！マシュ・キリエライト、先輩の壁になってみせます！」
そう言いながら両手を広げて、仁王立ちをしてみせた。無茶だと言おうとしたけど、マシュの足が震えているのが見えて、マシュも無茶だって分かってるんだと気付いた。それでも、なんで俺なんかを守ろうとしてくれるんだ。そんな事を考えていると、召喚サークルから出てくる光が一際強くなった。
「出てくるぞ！」
クーフーリンさんが叫ぶ。とても強い風が吹いてきて、マシュの全身にぶつかっている。所長はいつの間にか残骸を壁にしてうずくまっている。俺はどうすればいいんだ。俺は…

いや、一つあった。
話すこと、これぐらいしか俺にはできない。でも、クーフーリンさんは英霊は大体が人だと言っていた。つまり話せるってことだ。
友達からは聞き上手で話し上手だと言われた。どんなに気難しい人でも、話ぐらいは聞いてくれるだろう。
覚悟を決めて光を見据える。あの光の中にいるのがどんな人だったとしても、せめて協力ぐらいは取り付けてしまいたい。

――――藤丸立夏は忘れていた。自分の予想した、『大怪獣が出てくる可能性』を。実際、怒濤の展開に彼の頭がついていかずパニックになってしまっていたので、これはしょうがないことだろう。

光が弱くなっていく。誰が喚ばれたのか、ここに来て優しい人だったらいいなぁ、等と呑気な事を考えている将来のカルデアのマスターの前に姿を顕したのは――――

それは白くて四角くて

…あれ、ここ、どこだろう。確か穴を消して疲れたから休んで、そのあとは…

…思い出せない。それに、さっきまでいた場所は燃えてなかった。でも、目の前は炎でいっぱいだ。

ん、目の前に人がいる、嬉しいな。とりあえず起きなきゃ。

ええっと、青い人と、大きい盾を持ってる人と…その後ろに二人いる。

起きてる間に攻撃してこなかったけど、いつでも攻撃できるようにしてるから、私のことは知らないみたい。

「…あなたは、何者ですか？」

後ろにいるうちの男の人が話しかけてきた。私はＭＣＳだけど…違うよね。多分、私が敵か味方を聞きたいんだよね。声が恐る恐る、って感じだし。

でも…この人たちがどういう人なのか分からない。もし悪い人だったら、戦わないと。勝てるかどうかは別として。周りをこんな風にしたなら逃げるわけにもいかないしね。

…うん、決めた――――――

光の中から現れたのは、白い立方体だった…

これは、人なのか？英霊は人じゃないのか？

いや、そもそもこれは生き物なのか？なんか地面に転がったままだけど。

うわ！浮き上がった！なんか変な角度で回ってる…。ってことは、生きてるのかこれ。でも人じゃないよな。クーフーリンさんに聞いてみるか…

その時のクーフーリンさんの顔は、忘れられないものだった。
所長曰く、クーフーリンさんはケルトの戦士で、戦うのが大好きらしい。聞いたときはこの人が戦闘狂なんてそんなまさかと思った。まあ、マシュが宝具を使えるようにしてくれたときにその意味はよく分かったけど…。

否、自分の中で分かったつもりでいた。

クーフーリンさんはその時、笑っていた。何かが面白かったからか、違う。

あの笑顔は、獲物を見つけた獣が見せるような、そういう表情だ。
ヘビに睨まれたカエル、という言葉を思い出した。自分に向けられたわけでもないのに、体が震えて動けなくなった。
同時に、あの辺りを見回している立方体は、クーフーリンさんにそんな顔をさせられる実力があるのだと気づいて、立方体も恐ろしくなった。

――――――何をしてるんだ俺は！せめて話すって決めただろ！それぐらいできなくてどうする！
怖くてしょうがない。もしかしたら殺されてしまうかもしれない。でも、何もしないのは嫌だ！
声を出すのを拒む気持ちを押さえつけて、無理矢理声に出す。
「あなたは、何者ですか？」
言葉に反応したのか、立方体は此方を向いた。頼む、戦うのだけは勘弁してくれ…！

立方体は、
こっちに近付いてきた。なんだ!?何をしてくるんだ!?俺は食べても美味しくないぞ!?
危険だと思ったのか、クーフーリンさんが五つもの火球を立方体に

向けて飛ばして、マシュも立方体を盾で勢いよく殴りつけた。散々戦ったガイコツなら、跡形も残らないような攻撃を、立方体は耐えていた。

違う。その立方体は、攻撃なんてされなかったかのように傷一つなくて、ダメージを負った風ですらなかった。

強いんだろうとは思っていた。でも、二人を無視できるレベルなんて…。立方体がすぐ近くまで来た。先に攻撃したのはこっちなんだから、きっと仕返しをするんだろう。自分の死を想像して、恐怖で目を瞑った。

…腹の辺りに違和感を感じる。痛みというより、くすぐったい感じだ。不思議に思って目を開けてみると…

――！　！

立方体が俺の腹に向かって擦りよっていた。改めて近くで見てみて気付いたことだが、尖っているように見えた角は丸みを帯びている。堅いのに擦りよられて痛くなかったのはこのお陰か。

…それにしても、こうもじゃれつかれると家で飼ってたもこを思い出すなあ。人懐っこくて、誰にでも可愛がられるような子で。元気にしてるかなぁ…。

ん？なんで今もこが出てくるんだ？あの子は大切な家族だ。それが立方体に擦りよられて浮かんでくるのはおかしくないか？いや、ひょっとすると…

俺はこの立方体を可愛いと思っているのか…？

…なるほど。それなら納得がいく。

立方体を抱きしめる。マシュ達が何か言っていたが気にしなかった。

ひんやりしてそうだと思ったが意外と暖かい。立方体は、擦りよるのをやめてされるがままになっている。うん、やっぱりこの子はいい子なんだろう。攻撃されたのに全く気にしてないみたいだし。名残

惜しいがハグを解いて向き合う。
「力を、貸してくれるかな？」
立方体の子が、頷いたような気がした。

Ｌｅｔ，ｓ対話

『えっと…じゃあ、君は本当に力になってくれるんだね？』
困惑を含んだ声でロマニが問う。ＭＣＳは、頷くような身振りをすることでその言葉に肯定した。
「信用できるわけないでしょ!?何で英霊召喚を行ったのに、こんな…こんな、よく分からないものが出てくるのよ!?」
オルガは叫んだ。当たり前だろう。
だって、眼前で浮いているこの立方体は間違いなく歴史に名を残した存在ではない。
何故断言できるのか。それは、職業柄歴史や神話等に詳しいオルガですら、立方体が出てくるような話なんて何一つ聞いたことがなかったからだ。

それに、攻撃を仕掛けたことを気にしないどころか、その集団の一人に甘えるなんて謎な行動をする謎の物体を信じることなど、オルガにはとてもできなかった。
言葉にはしないが、マシュもクーフーリンも同じ気持ちだった。
「大丈夫です、所長。この子は敵じゃないです。だって、かわいいもん」
ＭＣＳをかばう発言をしたのはカルデアの臨時マスター、藤丸立夏だった。ＭＣＳを抱っこしながら発したその意見は、ＭＣＳを不審に思っている面子を納得させるには説得力が全く無かった。

――――――いや。それよりも。
この男は今、なんと言った？――――――

「「『かわいい…？』」」
「はい。かわいいじゃないですか、この子」

反応はそれぞれ多様だった。
立夏がいかれてしまったと錯乱するロマニ。元凶があの立方体にあるのだと考え、立夏とＭＣＳを引き離したオルガ。その手段が魅了スキルであると推測したクーフーリン。マシュは狂ってしまった立夏を正気に戻そうと必死に呼び掛けた。

もちろん立夏はこの反応にいい顔をしなかった。
まず自分はいかれていない。いかれてはいないが、こんな目に遭わされた分の誠意は見せてほしいと思う。
ＭＣＳに魅了されたのは事実だ。だが、それは魔性とかそんなものではなく、純粋な愛らしさに心を奪われただけなのだ。だからこの子は悪くない。
そう思わせるのが魅了スキルの恐ろしいところだと知らない立夏はそんなことを考えていたが、最初は自分も不気味に思っていたことを思い出し、しょうがないことだと己を納得させた。

良さが分からないなら、教えてあげればいいのだ。彼は深呼吸してから、皆に向き直った。
「皆」
立夏が声を発すると、彼らは自分の行動を止めて彼に目を向けた。この反応に彼は分かってもらえそうだと期待するが、実際は正気に戻ったのか、あるいは魅了が解けたのかと淡い期待を抱かれているだけだったりする。
「あれを見てほしい」
立夏が指し示した方向を見る。

そこには、独特な角度で回転する立方体があった。何をしてくるでもなく、こちらを観察しているように感じる。
…意図が掴めなかった。立夏は何かを成し遂げたような顔をしている。ますます分からない。

彼は嬉しそうにこう言った。
「ね？かわいいでしょ？」
「え？何が？」
それは誰の声だったのか。あるいは声が重なって一人の声に聞こえたのか。
立夏は怒った。自分の気持ちを分かってもらえない理不尽に。それと同時に、必ずこの分からず屋達にこの子の良さを分からせてやるのだと胸に誓った。
オルガ達は困惑した。何度見てもその姿はただの立方体であり、それをかわいいとはこれっぽっちほ思えない。良さを語られても、あの回転がいいのだとか角が実は丸いのがいいのだと意味が分からない。
やはり彼は狂ってしまったのだ。そう結論付けた彼らは、ＭＣＳをどうにかしてしまおうと考えた。
そこからは、まるで捨て犬を拾ってきてしまった子供と、元の場所に戻せと説得する親との口喧嘩のような一幕があったが割愛する。
普通の説得では終わらないと考え、頑なにＭＣＳをかばい続ける立夏の態度に疲れ果ててしまったロマニは、やけくそ混じりにこう言った。
『もうさ、いっそアレに話を聞いちゃえばいいんじゃない？』「それだあ！」
適当に言った意見に立夏が異常に食いついてしまった。
もしかしたら過ちかもしれない発言をロマニが悔いる時間もないままに、立夏はＭＣＳに向かって話せるかを聞いた。
ＭＣＳは首を振るような動作によって、それはできないのだと返事をした。

「ちくしょおおおおおおおおお!!!」
魂の叫びを放っている立夏の口をクーフーリンが塞いだのを横目に、ロマニはＭＣＳに確認を取る。喋ることができないだけで、言葉は理解できているのかと。ＭＣＳは頷いた。
『なら大丈夫だ。念話を使って会話することができる。立夏君とだけだけどね』

その言葉に立夏は残像が残るほどの速さでロマニに首を向けた。ＭＣＳもどことなく驚いている素振りをしている。
「念話ってどうやるんですか！教えてロマニさん！いや！ロマニ様！」
―――――――！―――――――!!
『ヒッ、ええっと…テレパシー？みたいな感じで、心の中で相手に話しかける感じ、かな？サーヴァントの契約をする必要があるけど…』「する！するよね!?」
―――――――!!―――――――

食いぎみに念話の方法を聞く立夏と、言葉こそないものの知りたいアピールなのか空中を跳ねるＭＣＳに引きつつもやり方を教える。契約、つまり完全にこちらの味方にならないといけないことを教えるが、双方とも気にならないようだ。

「俺の矛となり、時には盾となってください！」
―――――――！―――――――
ＭＣＳが言葉に対して頷く。立夏の右手の令呪が一瞬発光した。契約が成立した証だ。
それと同時に、立夏は目をつぶった。早速話そうとしているようだ。
（届け届け届け届け届け届け届け届け届け届け）
『は、はい。そんなに繰り返さなくとも、届いていますよ』
カッと目を見開いた。瞳が揺れて、直後に表情がとても嬉しそうな

ものに変わる。成功したらしい。
ロマニは苦笑しながらも、今日見てきた中で一番喜んでいる立夏を見ていた。

ＭＣＳ、一体何者なんだ…

火に包まれ、廃墟と化した町並みの中に何人かの人影があった。その中の一人、藤丸立夏は、真っ白な立方体とお互い見つめあっていた。

『Ｍｉｒｒｏｒ　Ｃｕｂｅ　Ｓｑｕａｒｅと申します。長ければ、ＭＣＳとお呼びください』

（うん、よろしくね、ＭＣＳ

…気になってたんだけどさ、なんでいきなり抱きついてきたの？）

『あー…それはですね。その、こういうことをして許してくれるなら、いい人なのかなぁ…と思ったんです』

（いい人の基準おかしくない？）

『ですよね!?ほんと何考えてたんだろ私…』

「いやいやいや！そのおかげでＭＣＳのかわいさに気付けたんだから！気にしない気にしない！

あっところでさ！攻撃されてたのに平気だったよね？ＭＣＳって強いんだね！」

『あ、それは私の能力で…』

『立夏君、ストップ』

念話なんだから喋る必要もないのに立夏が喋り始め、遂に我慢の限界が訪れたロマニが制止をかけた。自分達の世界に入るのはいいけど、知りたいことはこっちにも山ほどある。ＭＣＳに向かい合い、言葉を投げた。

『えっと…ＭＣＳ、でいいのかな？色々と質問してもいいかな？』

『大丈夫です。私に答えられることなら、なんでも』

言質を取れた。早速色々聞くことにしよう。ちなみに、ＭＣＳは喋れないので、ＭＣＳの意思を立夏がロマニ達に伝えることでコミュニケーションを取っている。

『ありがとう、じゃあまずは』「あなたは何者なの!?」

口を開いたロマニにオルガが割り込んだ。ロマニが所長!?と悲痛

に叫んだが、ＭＣＳが何者なのかはその場の全員が気になっていたことだ。ロマニに心の中で慰めをかけながら、ＭＣＳの言葉を待った。

『何者か…』

そう呟いて、ＭＣＳは黙り込んだ。言葉が見つからないのか、そこから何も言わないまま固まっている。

…

「ああもう、分かりました！質問を変えます、あなたがここに来る前にやっていたことを教えてちょうだい」

沈黙に耐えきれなくなったオルガが質問を変えた。

目の前の奇妙な立方体だって、英霊召喚によって現れたんだから一応は英霊のハズで、ならば英霊に至れるほどの偉業を成し遂げたのだ。その行為と結び付くような逸話から来歴を推測しようと質問をしたのだが、

『私は…よく、戦っていました。私のいた場所では皆戦うのが大好きで、私もよく戦っていました。』

「そう…それで、他には？」

戦い。ケルトとか、そこらだろうか。クーフーリンに視線で問いただすが、首を振ることで否定された。確かにこんなものがケルト神話にいた記述は知らない。もっと手がかりが欲しい。

『えっ、他ですか？散歩とか、友達と遊んだりとか…それくらいです』

「そ、そう…じゃあ！そのお友達の名前を教えてくれるかしら？」

オルガは困った。それではまるで、戦っていた以外は普通の人並みではないか。しかし、手がかりになりそうな言葉は出てきた。

友達だ。その中に一人でも歴史に名を残した人物がいれば、どこの出身の英霊なのかはとりあえず推定できる。

『はい。えっと、

有名な方は、クルエルティアさんに、マーシャルさんに、あとＡＤ

Ｓもですね。』

誰？

その場にいる誰も、挙がった名前に覚えはなかった。
まあ、当たり前ではある。何故なら、ＭＣＳも、その友達も、
――この世界の住人ではないのだから。

もちろん、カルデア一行にはそれを知るよしもない。
かといって嘘を言っているようでもないので、とりあえずは、改めて協力関係が結ばれることで落ち着いた。

実力の程は

「んじゃあ、次は俺からだ。あんたの力を教えてもらう。これから一緒に戦うってのに、何ができるのかも分からなきゃ困るだろ？」

続いてクーフーリンが質問した。

実力。それも確かに大事なことだ。

元々は、目標の大聖杯を守っている英霊――聖剣の持ち主に対抗する戦力を得るために英霊召喚を行ったのだ。結果、出てきたのは謎の立方体な訳だが。

しかし、本業ではないと言いながら確かな実力を持つクーフーリンと、なりたてのデミ・サーヴァントとはいえ、少しずつ力を付けていっているマシュ。

そんな二人の攻撃を受けていながら平気でいられるのだから、それなりには実力があるハズだ。

『分かりました。少し長くなるますが、いいでしょうか？』

「いや、言葉はいらねえ。あいつらで教えてくれればすぐに分かるからな」

クーフーリンは、そう言いながら剣や槍等の武器を振り回しながらこちらに向かってきている数体のガイコツに杖の先を向けた。散々叫んだ一同の声に釣られたのだろう。

「っ！敵です！先輩、指示を！」

聞き手に徹しながら休息を取っていたマシュも、敵に気付くと同時に盾を手に立夏に指示を求めた。

立夏はＭＣＳの方を見た。マシュ達がいるとはいえ、万が一ＭＣＳがやられてしまったらと不安で仕方ないのだ。

それに対してＭＣＳは、心配しないでと言うように、力強く頷いた。

「じゃあ、お願いしてもいい？」

その言葉を聞いたＭＣＳは、ガイコツに向かっていった。ある程度まで近付くと、自分の背後から小粒サイズの何かを生み出した。
「あれは…刃の欠片か？飛ばして戦うなら、アーチャーってところか？」
自分の方に向かってくるガイコツを火球で燃やしながら、クーフーリンは様子を観察していた。その言葉に立夏は、見るからに弓矢ではないものを武器にしているのに、なんでアーチャーなんだと疑問を抱いた。

ＭＣＳは浮かべていた欠片を、迫ってきているガイコツに向けて飛ばした。ガイコツは、飛んでくる欠片を振り回していた剣で弾いたが、弾かれた欠片は弧を描きながらガイコツの背後に回り込み、その頭を砕こうと速度を上げながら向かっていった。
カンッ
…欠片は、ガイコツの頭に命中した。だがその一撃は、頭蓋を砕くことなく、頭を軽く弾き、体勢を崩させるだけに終わった。
続けて、ＭＣＳは自身を光らせ、レーザーを撃ち出した。それは今度こそガイコツの頭を貫き、その時点でガイコツは消滅した。

その時、ＭＣＳの背後を取っていた生き残りのガイコツが、手に持っている剣を振り下ろした。
「ＭＣＳ！」
立夏が叫ぶ。それに対してＭＣＳは気付いていたようで、振り向きながら、瞬時に目の前に大きい半透明な板を作り出した。防御のためのものと思われるそれは、ガイコツの攻撃を受けると鈍い光を発した。
すると、攻撃をした側のガイコツの右手が吹き飛んだ。困惑しているようなガイコツの眉間に、先程のようにレーザーを撃つ。それと同時に、他に相手をしていたガイコツも全滅し、戦闘が終了した。
『とりあえずは、こんな感じです。私の攻撃手段は、今見せた欠片と

レーザーに、攻撃を反射する板と、あとは宝具だけです。』
「ああ、よく分かった。だがまだ知りてえことが残ってる。
俺や嬢ちゃんの攻撃が効かなかったのは、なんでだ？」

クーフーリンが問う。戦い方が分かったのはありがたいが、やはり一番知りたいのはそこだった。
防御どころか、無抵抗でいながら無傷だったのだ。なんらかのスキルによるものだろう。

「はい、それは――――――――」

答えようとした時、空気が揺れた。廃墟の曲がり角から土煙が上がり、獣の叫びが鼓膜を揺らした。
「やべぇッ、バーサーカーだ！」
クーフーリンが叫んだ。立夏は彼がバーサーカーについて話していたのを思い出す。
真名はヘラクレス。名前だけなら立夏ですら知っているような、ギリシャ神話の大英雄だ。
1サーヴァントでしかないクーフーリンがバーサーカーの真名を知っていたのは、バーサーカーのマスターが自分から真名を言いふらしていたからである。
かの大英雄も聖剣の持ち主には敵わなかったらしく、今はシャドウサーヴァントと化し、なぜか大聖杯への道を阻む事のない森の中に陣取っており、無視すれば問題ないとのことだった。

なのに。

「■■■■■■■!!!」

目の前にいる巨大な影は。

「なんでテメエがここにいるんだよ、バーサーカー！」

銀の鏡の立方体で出来たアーチャーが、皮装備に（ｒｙ

クーフーリンにはＭＣＳが分からなかった。

何者か、という話ではない。アレが召喚されたとき、クーフーリンはＭＣＳから強者が纏う独特の雰囲気を感じとっていた。

自分が生きていた時代の戦士達からよく感じた風格、しかしＭＣＳは別格だった。その雰囲気は、自分の師匠と同じように戦いにのみ生きる者のソレだった。

加えて人には見えない外見から、こいつには協力させるどころか意思疎通すら無理だとすら考えていた。

しかし、どういうわけかＭＣＳはマスターにじゃれついていた。最初は見境なく襲おうとしていたのかと思って加減抜きで攻撃したが、まるで通じなかった。

結局協力するということで話は落ち着いたが、普通攻撃してきた連中の協力をしようとは思わないだろう。

今だってそうだ。ＭＣＳは急に現れたバーサーカーに向かって、躊躇いもなく突っ込んでいった。出会ったばかりのマスターに、ここは自分に任せて逃げろとでもいうのか。それとも、まだ見せていない宝具が勝機を作れるのか？

いや、この際なんだっていい。

クーフーリンは臨戦体勢に入った。ＭＣＳにどんな考えがあろうと、頭数が減るのは困る。魔術は本業ではないが、まあそれなりには戦える。何より、今から逃げるには遅すぎるから、戦う以外に道はない。腹を括り、敵を見据える。

「■■■■■■■!!」

獲物を見つけたバーサーカーの咆哮が、戦いの合図となった。

２ｍを超える巨漢の握る無骨な大剣が、ＭＣＳに叩き付けられた。

丸太のような太い剛腕が、ＭＣＳに向けて振るわれた。

巨体にそぐわない俊敏さによる突進が、ＭＣＳの小さく四角い体を弾き飛ばした。

その〝戦闘〟は、その場の面々の予想より長く続いていた。

暴風のような猛攻がＭＣＳに向けて、既に何百と繰り返される。一見するとバーサーカーによる一方的な〝蹂躙〟にしか見えないそれは、しかし確かに〝戦闘〟だった。

作り出した欠片がバーサーカーの皮膚をなぞり薄皮を裂く。

レーザーは一発目に無意味と知って撃たず、攻撃を反射する板はバーサーカーに自らの馬鹿げた力を教える。

怒濤の攻撃に晒されながらも、ＭＣＳは反撃をしていた。

そして、どういうわけかＭＣＳは無傷だった。

乱打を受け続けているのは明白なのに、何故戦い続けていられるのか。とにかく、ＭＣＳはバーサーカーの攻撃を耐えていた。

かといって、状況はいいものではない。

ＭＣＳの攻撃はバーサーカーに大してダメージを与えられていない。それはクーフーリンも同様で、マシュは飛び込む隙を見出せないでいた。

今のところはＭＣＳが的になることで均衡を保ててはいるが、例えばバーサーカーの標的がＭＣＳ以外になれば。

マシュなら一撃は耐えられるだろう。だがそれだけで、二撃三撃で

潰されてしまう。立夏やクーフーリンのような後方担当では、一撃すら致命的になる。
しかもこの後に聖剣の持ち主との戦闘が控えているのだから、出来れば余力を残しておきたい。そんな折に、ＭＣＳが立夏の心に叫ぶ。
『宝具を使用してもいいでしょうか!?』
「いいけど、それでどうにかなるの!?」

立夏はあの筋肉ダルマはたとえ宝具でもどうにかするのは難しいと思い、そこら辺がどうなのかをＭＣＳに問いただした。緊急時なので念話なのに喋っているという突っ込みは入らない。
『なんとかなるかは分かりませんが、それでダメなら私にはどうしようもありません!』
言葉を返す。そうしている間にも、ＭＣＳはバーサーカーの攻撃で吹き飛ばされた。ＭＣＳだって、いつまで耐えられるか分からない。
立夏は覚悟を決めた。
「いいよ!使って!」
『はい!
宝具、使用します!』

その時、辺り一面が強い光に包まれた。その光は敵も味方も平等に宝具の対象として選び、彼らを夢幻の世界へと送り込んだ。

バーサーカーは標的を見失ってしまっていた。蹴っても殴っても倒れない四角いの。アレも化け物の一種だろう。なら、倒し方は分かる。
倒れるまで、蹴って殴るだけだ。今までもこれで試練を乗り越えてきた。

理性が狂化によって奪われてしまっているせいで、少し思考が鈍くなってしまっているのだが、バーサーカー自身はそれに気付けていない。今のシャドウサーヴァントと化したバーサーカーには、自分の主

を守るという使命感しか残されていない。
それなのにわざわざ森から出てきたのは、あの異端の四角い化け物が召喚されただろう時に、とても大きな危機を感じたからだ。
アレは今潰しておかないといけない。化け物だろうがなんだろうが、我が主に危険をもたらす可能性のある存在は残さず潰す。

そう結論した頃に、バーサーカーはようやく自分が立っている場所が、
燃える廃墟の町並みから、少し前まで陣取っていた森の中に変わっていることに気が付いた。
そして、幾つもの木の中に、バーサーカーは何者かの背中を見付けた。それが誰なのかを認識したと同時に、バーサーカーはその背中に向かっていた。

赤い外套に短い白髪。肌は褐色で、手に弓を持っている。
顔を見ずとも分かる。あれは、いつかどこかの聖杯戦争で下した弓兵だろう。
何故自分がここにいるのか、何故弓兵がここにいるのか、そんなことはどうでもいい。

目の前にいるのは敵だ。敵は潰さなければならない。バーサーカーは大剣を高く振り上げ、勢いのままに振り下ろした。
ところが、その一撃は赤い弓兵をすり抜け、地面を砕くだけだった。それを疑問に思うこともなく、バーサーカーは追撃を仕掛けようとするが、そこで世界が切り替わり、再び廃墟の町並みの中に戻ってしまった。
「■■■■■■!!!」
バーサーカーは雄叫びをあげ、森の方へ走り出した。よりにもよって敵を主のいる場所に残してしまった。すぐに向かわなければ、主か毒牙にかけられてしまう。

目の前の化け物よりも先に潰さなければ。
急げ、急げ。

『…なんとか、なりましたね』
ＭＣＳはそう言って、さっさと生成した欠片やらを消した。

知っている

『私の能力は「反転」です。攻撃を受けると傷を癒せるんです。その代わりに、攻撃を受けていないとダメージを受けていきますが』

ＭＣＳが打ち明ける。バーサーカーの猛攻を受けきった後で疲れてすらいないのは、逆に散々攻撃を食らったお陰で全快できたからだ。

「反転…じゃあ、お前さんは、攻撃でダメージは受けないってことか？」

クーフーリンが問う。えげつない能力だ。タネを知っていれば対処は簡単だが、知らなかったら確実に長期戦になる。面倒臭いことこの上ない。

『はい、そう思っていただいて大丈夫です』

「だったらさ！聖剣はＭＣＳに受けてもらおうよ！」

ＭＣＳの肯定に被せるように立夏が発言する。聖剣がどれ程のものかは計り知れないが、バーサーカーの攻撃をあれだけ耐えられたなら大丈夫そうではあると思っての発言だ。

ＭＣＳもその役を引き受け、クーフーリンは聖剣が放たれている間に宝具の準備をすることになった。

「んで、あの宝具はなんだ？嫌な奴の背中が見えたが」

『あっ、えっと…相手の見たくないものを見せる…って感じです』

「そうか、微妙だな」

『あ、あはははは…』

「あれが大聖杯…なんでこんなものが極東の…」

『資料によると…』

俺達は、レイシフトの目的の聖杯を前に立ち尽くしていた。
ちなみに聖杯とは、どんな願いも叶えてくれるとても貴重な物らしい。話を聞いたときは正直うさんくさいと思った。英霊も、話だけなら嘘みたいな存在なんだけどね。

でも、これなら確かに、何でも叶いそうだ。
巨大だ。廃墟になる前のどの建物よりもきっと大きい。見た目は器で、金色に輝いている。なんというか、見ていて神聖さを感じる光だ。

そして、その聖杯への道を塞ぐように立っている、あの人影こそがきっと――――

「悪いが、お喋りはそこまでだ。奴さんに気付かれたぜ。」
クーフーリンさんが声をかける。何か難しいことを話していた所長とロマニさんは口を閉じて、人影に目を向けた。
人影が歩み寄ってくる。徐々にその姿が見えてきた。
鎧を纏い、その下に長いスカートを履いている。短い金髪は綺麗に手入れされている。
あの人こそあのアーサー王であり、ならば右手に持っている剣が、聖剣――――エクスカリバーなんだろう。
でも、気になることがある。
「黒い…あれが、本当にあのアーサー王なのですか…？」
そう、黒かった。鎧も、ドレスも、手に握る聖剣すら。あれが理想の騎士で、あの黒い剣が聖剣だと言われても、誰も信じないだろう。
『うん、間違いない。何か変質しているようだけど、彼女はブリテンの王、聖剣の持ち主のアーサーだ。』
「彼女…？あっ、ほんとです。女性なんですね、あの方」
変質…何があったんだろう。アーサー王ですら、人が変わるような何かがあったのかな。
…って、女性!?アーサー王って男じゃないの!?

実は女だったなんて、そんな、ウソみたいだ…

「見た目は華奢だが甘く見るなよ。アレの魔力放出はバケモンだ。気を抜くと上半身ごとぶっ飛ばされるぞ」

「ご忠告感謝します。…はい、全力で応戦します」

クーフーリンさんがアドバイスをくれる。本当にいい人なんだけど、アーサー王を倒したらお別れらしい。また会えるといいな。

アーサー王はすぐ近くまで来ると立ち止まり、俺達の顔を流し見る。マシュを見ると少し目を見開いてから、微笑んでいた。

「――――――ほう。

ここまで辿り着くとはな」

「なっ!?テメエ、喋れたのかよ!?今までだんまり決め込んでやがったのか!?」

「ああ、何を語っても見られている。

故にかかしに徹していた」

見られてる…？何のことだろう、俺達以外にも誰かいるのかな。

「だが――――――もう、いいだろう。

構えるがいい、名も知らぬマスター達よ。

貴様らが人理の救済者に相応しいかどうか、この剣で確かめてやろう！」

王様の言葉について考えていたが、アーサー王が聖剣を構えたことで中断させられた。魔力を集中しているらしい聖剣は黒く輝いて、今にも圧縮された光が爆発しようとしている。

「ＭＣＳ！」

『はい、お任せを！』

こうしていたいんです、と霊体化していたＭＣＳが俺の前に立つ。やる気満々だ。戦ってばかりだって言ってたし、戦うのが好きなんだろうな。

「、 貴様が…まあいい」
いきなり現れたＭＣＳを見てアーサー王が驚いているようだ。気持ちは分かる、初めて見ると誰だって驚くよな。
『行きましょう――――マスター！』
「ああ、頑張ろう！」

「行くぞ。
卑王鉄槌、極光は反転する
――――光を呑め！約束された勝利の剣！」

アーサー王が宝具を放った。黒い極光が俺達を呑み込もうとしている。あんなの食らったら絶対死ぬよな。それを迷いなく使う辺り、アーサー王は結構容赦ない性格だよ、反転してるからかもしれないけど。

でも、まあ。
そんな事を考える余裕があるぐらいには、安心できてるって事だよな。

考えてみれば、おかしい話だ。ちょっと前までは普通に生きてたのに、今だってもしかしたら死ぬかもしれない目に遭っている。
人付き合いは良かったけど、偉人と話すなんて思ってもなかった。
でも、クーフーリンさんは偉いのに偉そうにしないとってもいい人で。俺みたいなのを先輩と呼んでくれる子とも知り合えた。

何よりも――――俺にとって最高の、友達ができた。

ＭＣＳが極光に衝突した。瞬間、視界一杯に輝く闇が広がった。しかし痛みはなく、どうやらＭＣＳが聖剣のエネルギーを吸収しているようだった。おそれは光が止むまで続き、遂に聖剣の極光は、立夏を

呑むことなくかき消えてしまった。
一同は本当に聖剣を無力化させたＭＣＳに驚愕した。立夏はＭＣＳの凄さに感激して、ＭＣＳは今更ながらアーサー王の姿に見覚えを感じた。

――――そして、アルトリア・オルタは、自分の宝具が無意味に終わった事に何の感慨も抱かなかった。

『専用対策』

自分に向けて飛ばされた欠片を、魔力放出によって吹き飛ばし、火球はかわすまでもなく高い対魔力で無効化され、盾による突撃は、剣の一撃で返り討ちにする。

三体の英霊の連携を捌く。聖剣を放ってから十分ほど、アーサー王はここまで一度も自分から攻撃をしていない。マシュはカウンターを受けながらも繰り返し食らいつき、クーフーリンは順調に宝具を発動させるための魔力を練っている。

立夏達生身の人間は、人数で上回っているのが功を奏しているのかと思ったが、英霊達はアーサー王が手を抜いていることに気付いていた。

クーフーリンは違和感を抱いた。あの騎士王は騎士らしく真剣勝負を好むのだ。性質が変わっていても根っこは同じハズで、どんな相手でも手を抜くことはしない。

何か理由があるのか…そう考えた時、ＭＣＳの能力を思い出した。

攻撃を受けていないとダメージを負っていく

――――――!!

ＭＣＳを見る。相変わらず傷一つない、真っ白な立方体だ。

しかし、存在は薄まって、いくつもの光に包まれていた。クーフーリンは、ＭＣＳがどんな状況かをすぐに理解した。

ＭＣＳは座に還ろうとしている。悔しさから歯噛みする。騎士王の意図がようやく分かったのだ。

アーサー王は、何でか知らないがＭＣＳを知っている。そして、手を抜いているように感じる立ち回りは、単にＭＣＳを倒すのに必要なことをしていただけなのだ。

「ＭＣＳ?･どうしたのＭＣＳ!?」
立夏もＭＣＳの異変に気付き、心配の声をかける。クーフーリンは、舌打ちしながらいつでも宝具を発動できるように準備を整えた。
ＭＣＳは立夏に応えず、アーサー王に問い掛けた。
『…やっぱり、いつかにお会いしましたよね?･セイバーオルタさん』
もちろん、その言葉は届かない。しかし、自分が話しかけられている事も、何を聞かれているのかも直感で察しているアーサー王は答える。
「私には貴方との記憶はない。だが、貴方が何者なのかを教えられた。故に貴方の力を知っている。
――――申し訳ない、異界の戦士よ。貴方を倒すのに必要だとはいえ、貴方に私の全力を見せられなかった。私は彼等を見極めなければならない。
機会があれば、その時はお互い全力で戦おう」
一同には彼女の言葉の意味はあまり分からなかったが、ＭＣＳには通じたようで頷いている。
ＭＣＳは立夏の方を向いて、最後になる言葉を伝えた。
『マスター、私はここまでみたいです。あんまりお役に立てなくてごめんなさい。
初めて人とお話できて、本当に嬉しかったです。
マスターはいい人です。マスターなら、たくさんの人が力を貸してくれます。だから、私がいなくても大丈夫です。
あなたたちの旅路がどうか、幸せなものでありますように』
ＭＣＳが地面に墜ちて、姿が消えていく。薄れていく意識の中で、ＭＣＳは立夏が泣き叫ぶ声を聞いた。

ハッと意識が戻る。自分がいるのが、穴を塞いだ場所に戻っていることに気付く。
あそこでは色々な事を体験した。骨だけの人とか、すごく大きい人と戦った。あの場所では、自分はそこまで強くなかったけど。そのせいでセイバーオルタさんにも負けてしまったし。

でも、初めて人と話せた。
思い出すと嬉しくて堪らない。まるで夢みたいだ。

…さっきまでの出来事が、本当にただの夢に思えてきた。穴はもう空いていない。自分があの場所にいた証拠は何もない。疲れて眠って、その間に夢を見ていただけなのかもしれない。

悲観的になっているＭＣＳの心の中に、誰かの声が響いた。
『ＭＣＳさん、聞こえますか？』
突然誰かの声が聞こえて飛び上がる。辺りを見回しても誰もいない。寂しさからか、幻聴まで起きてしまったようだ。思わず溜め息を漏らす。
『ＭＣＳさん？今私はあなたの心に話しかけています。念話と同じようなものです』
声が教えてくる。幻聴ではないみたいだ。それにしても念話とは便利なものがある。

…あの知り合いの魔法使いなら、念話ぐらいは使えそうだけど。使えるのに話してくれなかったなら少し傷付く。
『ＭＣＳさん？』
『あっ、すみません。少し考え事をしてました。それで、私に何かご用

でもあるのでしょうか？』
『はい、あなたに頼みたいことがあるのです。
あなたが訪れた我々の世界は、何者かによって人類史が焼却――
――滅ぼされてしまったのです。あなたには、カルデアの人理救済に協力してほしいのです』
『人理救済…ですか。でも、私にはあなたたちの世界に行く手段はないですよ？』
知り合いの魔法使いは別世界に行く手段を持っているけど、自分以外には使えないらしい。
『大丈夫です。そこは私が少しカルデアの召喚システムに干渉をして…』
意味はよく分からないけど、なんだか物騒なことをしようとしているらしい。

『まあ、召喚をするまで時間がかかるので、しばらくここで待っていましょう』
そう言われたが、話せる相手がいるうちは話しておきたい。それに聞きたいことだってある。謎の声に質問をする。

『貴方は、何者なんですか？』
『あなたのマスターもあなたに同じ質問をしましたね。
何者か…答えづらいですね。考えておくので、他の質問をどうぞ』
聞きたいことがあるのがバレていた。それならしっかりと聞いておこう。
『セイバーオルタさんに私のことを教えたのは、貴方ですか？』
『ん、何で分かったんですか？』
誤魔化しすらしないのか、図太い。
『話のネタ程度に聞いてみただけなんですが…逆に何でそんなことをしたんですか？』
『我々の世界に異物はいらないと思いまして。でも、その後に人理救済の協力者は一人でも多い方がいいと判断しました。気を悪くした

ならごめんなさい』
『いえ、最近は私と戦う方が攻撃をしてくれることは少ないので。むしろ久しぶりに攻撃してくれる方と戦えて満足です』
遠慮も無しに異物扱いとは、いい性格をしている。

『あ、そろそろ召喚されますね。それでは行きますよ』
そう言うと、眼前にあのとき塞いだものと同じ穴が出てきた。
『これにあなたたちで言う力を注ぎ入れれば、再び我々の世界に行くことができます。その間あなたの世界では何もできませんが、よろしいですよね。
できれば力を多めに注いでいただきたいです。…コホン、ではよろしくお願いします』
返事をするまでもない、不甲斐ない結果に終わるのはもう嫌だ。前の４倍ほど力を注ぎ込む。穴は急速に閉まっていき、意識もまた薄れていく。その中で、
『ああ、そういえば私が何なのかをまだ言ってませんでしたね。
――――私はアラヤ、人類の存続願望の総意。その中の形成人格の一つです』
そんな声が聞こえた――――

そして、
「ＭＣＳうううぅぅぅぅ!!!!」
号泣しながら抱きついてくるマスターを泣き止ませるのに、ＭＣＳはとても苦労するのだった。

召喚

オルガ所長が殺された。俺の目の前で。
ＭＣＳが死んだ。俺の、目の前で。

藤丸立夏はその日、初めて人の死を見た。
死んだのは彼が知り合った人で、殺したのはその彼女が懇意にしていたハズの男。何故殺したのかと声を荒げて問えば、もう死んでいるからと理由にならない答えが返ってきた。
結局その男はどこかに消えていき、立夏はそれを、ただ立ち尽くしながら見送るだけだった。

無事カルデアに帰還することができたが、溺愛していたＭＣＳもいなくなってしまって、マシュは立夏が塞ぎこんでしまわないかと不安だった。

「召喚をしよう」
感情の見えない顔でロマニやダヴィンチの話を聞いた後に、立夏はそう提案した。特異点を攻略するための英霊が現在マシュしかいない以上、確かに英霊召喚は必要だし、ロマニも話が終わったらそれを言うつもりではあったが、立夏は続けてこう言った。

「ＭＣＳを呼ぶよ、俺は」
無表情に、少しだけ熱が混じっていた。

英霊召喚には、二つの方法がある。
一つは、召喚したい英霊にまつわる遺物を使う触媒召喚。コストはかさむが、その遺物の持ち主本人、またはその縁者を召喚することができる。

もう一つが、触媒に頼らず、召喚者と英霊との縁によって召喚を行う、いわゆる縁召喚というヤツである。
召喚者にとって馬が合う英霊が召喚される場合が多いが、何者が召喚されるか分からなく、戦力足りえない英霊が召喚される可能性があるし、相性の悪い英霊を召喚してしまったら目も当てられない。
よって、正規の聖杯戦争の参加者は、大体があらかじめ召喚する予定の英霊の遺物を用意していた。

一方、立夏は縁召喚によってもう一度ＭＣＳを召喚しようとしていた。何故か知らないが自信満々で、曰く、自分とＭＣＳは運命の糸で結ばれているからイケるらしい。できればＭＣＳの欠片を使いたかったそうだが、今更な話だった。
ずっと真顔でそんなことを言うものだから、威圧感が凄かった。

カルデアの面々は無理だろと思った。過去に名を残した者なら、作家ですら英霊として座に召し上げられる。つまり英霊は大勢いて、その中でたった一人を狙って召喚するなんて、それこそ本当に運命で結ばれていないと不可能だ。
まあ、どのみち英霊召喚は行われる予定だったので、各自慰めの言葉を考えつつも、とりあえずやらせてみることにした。
「ＭＣＳうううううう!!!!!」
そしたら、どうだ。いきなり本当にＭＣＳを召喚してしまった。これにはカルデアも思わず困惑しつつ立夏の運命力にドン引いたが、泣き崩れたとはいえ立夏が表情を取り戻したので、良かった事になった。

自分が消えてから何があったかを質問するＭＣＳに特異点・Ｆでの成り行きを教えつつ、立夏を泣き止ませるという混沌めいた状況になった召喚部屋。
立夏は別に心のどこかで召喚できないと思っていたから無事召喚

をできて泣いたとかではなく、死に直面して緊張し通しだったが、ＭＣＳの姿を見たら安心して緊張の糸が切れてしまったようだ。

「さて、立夏くん」

ロマニがわざとらしい咳をして発言した。自分に注目が集まったのを確認してから、改めて発言する。

「無事……無事！ＭＣＳを召喚できてよかったと思う。君はＭＣＳが大好きみたいだからね。積もる話もあると思うけど、まだ召喚が終わってないから、まずはそれをお願いしたい。

あと、そろそろＭＣＳを放してあげたらどうかな？」

召喚されてからずっと抱きしめているＭＣＳを放しせと言われて、立夏は露骨に嫌そうな顔をしたが、ＭＣＳに何かを言われたのか、渋々とＭＣＳを放した。

そして、二度目の召喚。マシュの盾が置かれている召喚サークルに、聖晶石という魔力で出来た石の塊を捧げる。

一度目や冬木での召喚と同じように、サークルから光が満ち溢れ、光が三つの輪に束ねられていき、部屋の中が爆発した光の奔流に包まれた。

そして、やがて光は収まっていき、サークルの前には召喚された英霊の姿が…

「あれ？誰もいないよ？」

立夏の言葉通り、英霊も何もそこにはなかった。一同は一瞬召喚システムに不備が生じたのかと硬直したが、立夏の足元に小さい何かが転がっているのを見付けた。

足元の何かに気付いた立夏は、それを手でちょいと摘まんで持ち上げる。

それは小さいが人型で、ライト付きの赤いヘルメットにを頭に被り、青いリュックを背負っている、どことなく弱そうな、冒険家って感じの男だった。
ぴくりとも動かないから、多分人形とかだろうと当たりを付けていじっている立夏にロマニが話しかける。

「それは魔術礼装だね。武器になる物とか盾になる物とか、まあ色々ある。それがどんな効果を持ってるかは分からないけど、とりあえず立夏くんが持っておくといいよ」
そう言われたが、一応マシュとＭＣＳにいらないかどうか聞いておく。マシュは普通にいらなかったみたいだけど、ＭＣＳは人形をどこかで見た気がすると言っていた。思い出したら教えてと返事をして、確かに英霊の反応だったんだけどと唸っているロマニに断りを入れてもう一度召喚をする。そして、現れたのは――――

「よお。俺は…オルガ。ああ、オルガだ。クラスはアーチャー。ま、よろしく頼むぜ？マスターさんよ」

そして、第一特異点、フランス。本来の親玉である竜の魔女は召喚した英霊にの手によって既に葬られ、聖杯も奪われた。

「■■■■…」
彼は、バーサーカーとして召喚されたわけではなかった。しかし、竜の魔女が外見で勘違いした挙げ句、
＜バーサーカーよ！貴方は身も心も更に狂気に委ね、バーサーク・バーサーカーとなりなさい！＞
と、令呪によって命じてしまった。令呪の拘束力は凄まじく、彼を本当にバーサーク・バーサーカーにしてしまったが、そんなことをさ

れて黙っていられるハズもなかった。

「■■■…ヴゥゥ」

思い出したらやはり腹が立つ。尊厳を踏みにじられるのは、誰にとっても心地いいものではなかった。

その〝黒い鬼〟は、紅い眼を輝かせ、在りし日のフランスをさまよっていた。

1を知る

――――鉄華団

火星の組織の少年兵達が創り上げた私設組織。

苦境から這い上がろうと勝ち取りたい明日のために戦い続けながら、理想を現実にすることは叶わず散った。

その団長、オルガ・イツカ。家族である団員と、今日を、そして明日を生きるために奮闘したが、ヒットマンの凶弾に倒れ、遺された団員達に道を指し示しながら逝った――――

「…とまぁ、そして」

「待って！火星!?火星って宇宙だよね!?」

召喚が終わってから。

「ん、あんた、こんなところで何してるんだ？」

「いやぁ、働きすぎだ！って言われちゃってね…ははは」

働きづめなんだから少し休めと、管制室から弾き出されぶらついていたロマニは、先程召喚されたばかりのオルガと話していた。

ロマニは、オルガについて知りたかった。革のズボンを履き、ジャケットを腰に巻き付け、逞しい上半身を晒すその姿から、近代の英霊らしいと当たりを付けてはいたが、それ以外のことは何一つとしてわからなかった。近代において、『オルガ』という人物は歴史に名を残していないのだ。

一応、ピカソの第一夫人の名前がオルガではあるが、召喚されたオルガはどうみても男なのでそれはないだろう。

所長のうんちくを聞かされるにつれていつの間にか伝説等に詳しくなっていき、そこそこに知識があると自負していたロマニにとって、英霊の服装で生きた時代を推察するぐらいしかできないというのは中々に堪えた（ＭＣＳは論外である）。

そんな折に、この出会いである。そうだ、その人について知りたいなら、直接聞けばいいのだ。そのあたりの事情において、英霊というのはとても都合がいい。

そう考え、しばらく雑談したのち、ロマニはオルガにこう聞いた。

――――――――”君はどんな英霊なのか、何を成したのか”、と。

「…鉄華団」

しばらくの間黙っていたオルガは、ぽつりと呟いた。

「鉄華団。決して散ることのない鉄の華。そうあれと、そうありたいと、願いを込めて付けられた名前だ」

「鉄華団、いい名前だね」

前触れもなく始まった語りに、返した言葉は当たり障りのないものになってしまった。オルガはそれに構わず続ける。

「オルガ・イツカ。鉄華団のリーダー…団長だった男の名前だ」

他人事のように語るその顔には、隠しきれない程の哀しみが滲んでいた。

英霊とは過去の人だ、必ず死を経験している。そしてその死は、必ずしも幸福な最期とは限らない。

悲痛な死を遂げる者もいれば、裏切りによって殺された場合すらある。目の前の彼も、仲間と信じていた誰かに背中を刺されたのかもしれない。そんな繊細な事情を、今から話そうとしてくれているのだ。

ロマニは居住まいを正し、神妙な気持ちでオルガの言葉に耳を傾ける。オルガは静かに語った。鉄華団の軌跡を、オルガ・イツカの生き様を――――――――

そして、開幕のやりとりに至った。

まず、火星で暮らしてきたという嘘のような話に驚いた。しかも彼らが築き上げた鉄華団の団員たちは少年兵で、過酷な生活を強いられ

てきたという。
　モビルスーツと呼ばれるロボット。３００年前に起きた厄祭戦。オルガ・イツカの親友、三日月・オーガスが半身不随になったという話で受けたショックからようやく立ち直ったところで、正気に戻ったロマニの叫びが修復作業の続くカルデアの一室に響いた。
「今の地球には一般人でも乗れる宇宙船なんて作れるわけがない！まさか君は未来人…？っていやいや！」
　規模の大きい話を聞いているうちに、飛躍しすぎた自分の発想にツッコミを入れる。そんなあたふたとしたロマニの様子に、オルガは笑いながらも真実を打ち明けた。
「ああ、悪い悪い！あんた、ＭＵＧＥＮを知らないんだろ？じゃあ、ＭＵＧＥＮについて話さなきゃな」

　オルガはズボンのポケットを漁り、取り出した何かを机の上に置いた。

「これは…？」
　それは一枚の手紙だった。乱暴に取り出されたせいでくしゃくしゃになっているが、荒い字で大きく『果たし状』と書かれているのがわかる。
『招待状』ってやつらしい。知らないうちに持ってた。これがあれば、ＭＵＧＥＮに参加できるんだとよ」

　…さっきから、無限無限と言われても、なんのことだかさっぱり分からない。説明すると言ったんだから、肝心なところの説明に早く入ってほしい。
　そう言うと、せっかちな奴だと溜息を吐かれた。
「ＭＵＧＥＮってのはな、格闘大会だ。超規模のな」

ＭＵＧＥＮを知る

「格闘大会？えっと…それだけ？」

つい本音が漏れる。果たし状と言うからもっとこう、不良のケンカとかそんなものだと思っていた。

「あぁ、あんたの言う通り、ただの格闘大会だよ。いつだったか、あいつが出たのも見られたぜ？」

オルガが返事をする。勝手に期待していただけとはいえ、拍子抜けしてしまった。知らないうちに張っていた肩の力を緩め、言葉の端から生まれた違和感をかき消すために問う。

「そうなの？もっと物騒なものだと思ってたからほっとしたよ。ところで、あいつって誰のことなんだい？」

「ＭＣＳ」

気のせいか、巨大な角砂糖の名前が聞こえたような気がする。

「うーん…ごめん、聞き間違いしちゃったみたい。もう一回、言ってくれるかな？」

自分はきっと疲れているんだ、あとで耳通しが良くなるマッサージをしてぐっすり眠ろう。未来の自分にそう誓いながら、本当は何を言ってたのかを確認する。

「ＭＣＳだよ。あの白くて四角いの」

結果、間違いは無かった。自分の知らないＭＣＳでない可能性すら皆無らしいと察したロマニは、せめて詳細を問い詰めることを選んだ。

「格闘大会って言ってたよね？アレが参加できるの？」

「アレってロマニお前…あー、ＭＵＧＥＮってのはな、格闘大会ではあるけど、参加者に制限はないんだよ」

「…つまり、どういうこと？」

焦りからつい口汚くなってしまったのを指摘されてしまう。心の中でＭＣＳに申し訳ないと思いつつも、どこまでも曖昧な返しに対して追求する。

そして、ロマニは信じられないような言葉を突き付けられることとなった。

「望みさえすれば、誰でも戦えるってことだ。格闘家とか戦士は当たり前だが、勇者やら戦闘機乗りやら殺人鬼やら、あげく鬼だのタヌキだの、国旗まで戦うんだぜ？立方体が戦ってたとしてもおかしくないだろ？」

「いや待って色々とおかしすぎる」

信じられないというか、理解したくないレベルだった。

「…それで、ＭＣＳをその、ＭＵＧＥＮ？って大会で見たって？」

「…ああ、ここにいるやつは、ちょっと様子が違うみたいだがな」

ここまで、ロマニが説明の意味不明さに困惑し、さすがに分かりにくかったかと説明をし直され、その説明も結局分かりにくかったせいでますます混乱してしまう流れがあったが、割愛する。

なんやかんやで、参加者云々について無理矢理割り切ったロマニ。最後にはお互いキレ気味で話し合っていたせいで散々に疲れきってしまっていたが、まだ気になることが残っていたので気力を振り絞る。

「それはそうだろうね。英霊はあくまで本人の一側面。君が知っているＭＣＳと違うように感じるのも無理はないよ。
それはそれとして教えてほしい。ＭＵＧＥＮは、どこで開催された大会なんだ？」
オルガは間違いなくＭＣＳについて知っている。思い直してみれば、オルガはＭＣＳを紹介していなかったのに名前を知っていたし、英霊の姿ではないだろうＭＣＳを見たようだった。少ない情報で無理して仮説を立てるより、素直に知ってる人に聞いた方が楽だし早いし確実である。

「どこで、なぁ…悪いが、よく分かんねえんだ」
「えっ」
確実なハズが、突き放されてしまった。

「いや、そもそも前提から違うか。ＭＵＧＥＮはこの世界の、俺がいた世界の催しじゃないんだ」

どうしようか。せっかくさっき割り切ったばかりなのに、もう意味不明だ。オルガもそれを察したようで、慌てて補足を加えた。

「すまんすまんすまん！分かりにくいよな？俺もそう思う。証拠はあるんだよ、これだ」
オルガは、机に置かれっぱなしだった果たし状を指差した。そういえばこれのこと忘れてたな。そんな何気ない気持ちで手に取り、中身を見ようとして、手に走った強めの衝撃に襲われた。

「!?っ、オルガ、何を…！」

「…説明しなかったのは俺が悪い。でもな、だからこそこれから話すところだったんだよ。

それを開くのは絶対に駄目だ。地獄を見るぞ？」
ロマニの手から奪い取った手紙をポケットにしまいながら、何やら物騒なことを言い始めたオルガ。手をさすりながら真意を問うたロマニも神妙な顔つきになり、オルガの言葉を待った。

「その手紙は招待状だ。原理は知らないが開いたら最後、ＭＵＧＥＮの開催場所に飛ばされちまう」

「…え!?いやそんな、手紙からは魔力を感じなかったのに…いや、それよりも、何でそれで、ＭＵＧＥＮが別世界で開かれてるってことになるんだい？」
手紙が恐ろしい力を秘めていたのは後回しだ。何よりも、それがどう繋がるのかを知りたい。

「俺以外にもこの招待状を持ってるやつらがいたんだよ。そいつらはそれなりに顔が知られてる俺のことを知らなかったし、同じように元の世界で有名だったらしいそいつらのことを俺は知らなかった、誰一人としてだ。いくらなんでも、おかしい話だろ？」
手紙を持っているならどこか別の世界の住人で、持っていないならＭＵＧＥＮの住人だ。あとはＭＣＳ本人に聞くのが一番早いだろう。
その言葉でオルガとの会話は終了した。ロマニは自室で休憩を取ってから立夏の部屋へ向かった。立夏がいなければ、ＭＣＳとコミュニケーションを取るのは難しいからだ。ドアをノックする前にオルガとの会話を振り返る。

…自分だけがこんな気持ちになるのは理不尽だ。八つ当たりで可哀想だが、立夏にも同じ気持ちを味わってもらおう。そんな気持ちでノックをして、返事がないのを確認してから勢いよく扉を開いた。

幕間　専用悪夢

召喚が終わってから、立夏は自分がめちゃくちゃ疲れていることに気付いた。特異点での戦いの連続や、人の死に直面したショックを考えれば無理もない。

ロマニはそう思い、立夏に部屋でゆっくり休んでおいた方がいいと告げた。

「うわっ！

…何だこれ、でかい木だなぁ」

部屋に戻って早々、カルデアに来たばかりの時に見ているハズの大きい木に驚いてしまった。どうやら自分が思ってるよりも疲れが溜まってるらしい。立夏はさっさとベッドに潜り込んで目を閉じた。

一人になって色々な想いが浮き上がってくる。そのほとんどが所長の死に関わるもので、あの時所長を助けられていれば。そんな後悔が特に大きく立夏の胸中を占めた。それを誤魔化すように目を強くつぶった。起きたときには、この痛みを受け入れられるようにと祈りながら。

「Ｚｚｚ～…Ｚｚｚ～…んぐぁ？」

眩しい。意識が覚醒してから、彼が最初に思ったのはそんなことだった。寝る前に電気は消しておいたんだから、それで眩しいと思うなら部屋に誰かが入ってきたってことだ。

立夏は体を起こし、自分の部屋に入ってきた人物に用を聞こうとして…いつの間にか自分が、どことも知れない場所にいることに気付いた。

「…レイシフトしたのかな？」

なんとなく冗談を言ってみるが、それに返事をする誰かはいない。

ロマニなら通信で、
『あははは、寝てるから悪いとは思ったんだけどね…』 とか返してくるハズだからレイシフトではないらしい。第一、ＭＣＳもマシュもいないのにレイシフトはしないだろう。

なら一体なんで…そう考えて、今のこの状況が〝ただの夢〟なんじゃないか、そんな結論に至った。それと同時に右ほっぺたをつねる。痛くない。ならばともっと強くつねってみたら、なんと物が破れる音と共にほっぺたが宙を舞った。
あー…これは間違いなく夢だ、やっぱり痛くないし。
立夏はよりにもよって、生まれて初めて見る自覚できる夢の中で、自分のほっぺたを破くという不名誉を得てしまった。

夢の中だという事に安心した立夏は、回りの状況を確かめてみることにした。
まず上を見る。青い空が広がっている。鳥とかは見当たらず、雲一つない快晴だ。
次に周りを見た。地面は土っぽい。地面は草も生えてない、いわば不毛の地で、建物やらは全くない。地平線が広がるばかりだ。はっきり言って更地だ。

つまり、自分は今、空にも地面にも何もない、更地に立つだけの夢を見てるわけだ。

「ふざけんなよおおおおおおおおおおお!!」
思わず叫んだのもしょうがないだろう。こんな夢だったら夢だと気付けない方が嬉しかったと思う。曖昧な意識でうろうろして、しばらくしたら目が覚めて、それで終わりだったろう。立夏は自分の不運を嘆いたが、それでも夢からは覚めてくれない。
やがて独りで延々とぼやくのも空しくなり、かといって他にできることもなかったので、仕方なく適当に歩き出した。

原理不明の修復をされたほっぺたに気付いた頃、ようやく変化に出会えた。人だかりを見付けたのだ。独り言を繰り返してなんとか間を繋いだ立夏は嬉しさに涙すら流しかけてその集まりに向かって走る。

近付いていって、人だかりの中心にリングがあることが分かった。更地にリングだけがぽつんとあることに立夏はおかしく思いつつ、人だかりの中の一人に声をかけた。

「すいません、このリングはどういう…」

「あぁ―!・負けちゃったかぁ、やっぱ■■■強えなあ…」

聞こえなかったのか無視したのか、その人は何かについての感想のような独り言を漏らすだけで、立夏になんの反応も示さない。立夏はめげずに別の人に話しかけていったが、他の人も同様に立夏に無関心だった。

ガン無視されたことに内心へコんだが、独り言の内容から先の展開が読めた。

まず、このリングは試合をするためのものだろう。それ以外に用途ないし。強いとか負けたとかは、試合で戦う選手のことを言っていて

周りの人が話している試合はもう終わってるけど、しばらく待てばまた始まるだろう。そう思い、興味を惹かれた立夏は、試合を見物することにした。

「お待たせしました!・只今より、ＭＣＳ対ア■■■ゼ■の試合を始めます!」

どこからか聞こえた実況風の声を合図にリング上に何かが二つ現れた。片方は宙に浮いた立方体、もう一つは大きな看板だった。更に唐突に雨が降りだし、立夏は急に色々起こって困惑しつつもリングを見た。

立方体はＭＣＳだろう。実況もそう言っているし間違いない。問題は看板だ。まさか看板が戦う訳ではないだろうが、リング上には他に何もない。
まさか本当に看板が戦うのか…。そう思ったとき、看板に書かれている言葉が見えた。

本日の試合は
悪天候の為
中止となりました

目を擦り、もう一度見てみる。

本日の試合は
悪天候の為
中止となりました

何度見直してみても変わらずに、それだけが書かれていた。
ＭＣＳは既にどこかに消えてるし、周りの人は何故か大爆笑している。いいかげん訳が分からなくなった立夏は、遂に思考を放棄した。

目覚めは最悪だった。長々と歩き続けていたような気もするし、意味不明な経験をしたような気もする。何か夢を見ていたようだが、思い出そうとしたら頭が痛くなった。
夢のことなんか忘れよう。そう思ったとき、部屋の扉が勢いよく開かれた。

「大変だ立夏君！ＭＣＳの出自が分かった！」
滅入っていた気持ちに追い打ちをかけるように張り上げられたその声に、立夏はただただ耳を塞ぐことしかできなかった。

第一特異点・暗夜百年戦争オルレアン

開幕十割（視界）

「無事に転移できましたね、先輩」

光のトンネルを抜けるような錯覚を越えて、マシュの声が耳に届いた。

「前回は事故に近い転移でしたが、今回はコフィンによる正常な転移、何の問題もないでしょう。念のためお聞きしますが、吐き気など、体の不調はありませんか？」

「うん、大丈夫だよマシュ」

身を案じてくれたことにこっそり感謝しつつ、体調は万全であると伝える。健康なのは昔からの自慢のひとつだ。

「それは良かったです。しかし、今後レイシフトの影響で何かしらの異常が及ぶかもしれません。少しでも体調に違和感を感じたら、すぐにドクターにご報告を」

「…時間軸の座標を確認しました。どうやら１４３１年のようです」

優しげに微笑んでいたマシュが、仕事をするときの真面目な顔に変わる。俺に情報を与えてくれるけど、年だけじゃ分かることが少ないから、もっと詳しく聞かせてもらうことになる。

「１４３１年というと、百年戦争の真っ最中です。ただ、この時期はちょうど戦争の休止期間のハズですね」

戦争に休止？気になったので聞いてみると、当時の戦争は最近ほど切羽詰まったものではないらしい。考えてみたらそりゃそうだ。百年間戦い続ける、なんてふつう無理だよな。

「そうですね。この時代の戦争は今と比べればのんびりしたもので、捕らえられた騎士が金で釈放されるのも日常茶飯事だったとか…先輩？」

ところで、さっきから気になってることがある。

「マシュ。

なんか懐中電灯とか持ってない？」

気になっていたこと。それは視界を埋め尽くす黒だ。こんなに何にも見えないのは、小さいときに行ったキャンプ場以来じゃないか？実際、マシュのいるところも聞こえてくる声から何となくそこらへんと当たりを付けてるだけで、正確な場所は分かってなかったりする。

「懐中電灯。ライトのことですね、少し待ってください…」

恐らくマシュがいるだろう場所から、ガサゴソと音が聞こえてきた。きっと持ち物を改めているんだろう、俺はそのガサゴソ音を静聴していたが、しばらくしてからその音は急にピタッと止んだ。

「すみません先輩、私は不甲斐ない半英霊（デミ・サーヴァント）です…」

どうやら持ってないらしい。俺も持ってないからお互い様、お互い様。

『よし！回線が繋がった！映像が見えないんだけど二人とも聞こえる!?』

マシュを慰めていると、付けていた通信機からロマンの声が聞こえてきた。俺が返事をするより早く、立ち直ったマシュがロマンに答えた。

「もしもしドクター、こちらマシュ。しっかり聞こえています。映像が見えていないのは、単に夜だから暗いだけです。暗視機能を使用することを推奨します」

ロマンはその言葉を受けて、さっそく暗視機能を準備し始めた。カチャカチャとキーボードを叩く音を耳にしながら、俺とマシュは同じ一点を見た。

「とても綺麗です。日が良かったのでしょうね」

「ああ。すごく、いい月だ」

暗くてお互いの姿が見えなくても、言葉の中身で俺達が同じものを見ているのが分かる。

俺達が見たその満月の光は、夜闇の中の特異点で最初に見る、黒以外の彩りだった。

×2→×1

「おっ見えたぞ！よかった、二人ともちゃんとレイシフトできてるね」
月を見るのも飽きてきたし、暇だからしりとりでもしようとマシュに提案してからしばらく。
見た目的に日本語には疎そうだから接待してあげようとか思ってた立夏は、気付けば執拗な『る』攻めに屈する寸前で、ちょうどよく飛んできたロマンからの通信に助けられていたりした。
「よかったついでに朗報だ！ロマンを待ってる間退屈でね、周囲の生体反応を調べてみたんだ。そしたらね？割りと近くに、人間らしき反応が多数あったんだよ！」
ロマンに割り込んでダヴィンチちゃんが口を開いた。ダヴィンチちゃんは、前からカルデアに召喚されていた英霊だ。自分の容姿を有名な絵画のそれに変えてることと、時々ＭＣＳに向ける熱視線を気にしなければいい人だと思う。うん。
「反応があった位置に町があった記録はないから、兵士の砦だと思う。そこまで遠くもないから、ひとまずそこに行ってみてほしい。暗いから、足元には気を付けてね？」
道案内は任せてね、と付け足してロマンが喋る。俺はそれでいいと思うけど、一応マシュの意見を聞いてみる。
「はい。現状、何の手がかりもありません。現地の方から情報を得られれば、特異点修復の手助けになるでしょう。行くべきだと思います、先輩」
言ってることには同意見だ。同意見、なんだけど、マシュの様子がおかしい。めっちゃ笑顔だ。マズい、嫌な予感が…
「近いとはいえ歩きです、目的地までは時間がかかるでしょう。
到着するまでの間、先程までの続きを楽しみましょうね？」
語彙力の差が大きすぎて勝負にならないからと、キャラクターの名前やらなんやらをありにしてもらった上で立夏が詰んだ頃。
「ぷ…ぷ…んー……あっ！マシュ、あれ見て！」

「先輩、誤魔化しは効きませ…あれは」
月以外に何一つ代わり映えのなかった暗黒に、優しい光明が差し込んだ。立夏達からそう遠くない所に、明かりが灯されていたのだ。
明かりはユラユラと上下しながら、立夏達に向かって進んでいっている。多分たいまつを現地の人が持ってるんだろう。このまま行けば、明かりの主は立夏達を認識するに違いない。
ところが。立夏達はずっとしりとりをしていたせいで、現地の人間と出会った時のコミュニケーションをどうするか考えていなかった。ロマンも砦に着くちょっと前ぐらいにコミュニケーションの指南をしようと考えていたので、結果的に打ち合わせが全く出来ていない。
『どうしようマシュ、俺外国語で会話なんてできないよ!?』
『し、心配ありません、私は英語を話せます。英語は世界の共通語、特異点においてもそれは変わりないハズです!それにぼんやりとしか見えないですがあの姿はフランス兵でしょう。同じヒューマノイドならきっと分かりあえます!』
マシュは念話でそう結論付けると、明かりに向かってゆっくりと歩き始めた。立夏はマシュの後ろ姿を呆然と眺めていたが、自分が置いていかれている事に気付き、慌ててマシュの背中を目がけて駆け出そうとした。足元に気を留めもせずに。
「マシュ、待って…うわっ!」
小石につまずいてすっ転ぶ立夏。反射的に地面に伸ばした手と曲げた膝が擦れて痛む。ますます慌てて起き上がろうとしたが、不思議なことに体が動かない。
マシュに助け起こしてもらおう。そう思い、マシュを呼ぼうとしたが声が出てこない。代わりに立夏が聞いたのは、壊れたホイッスルのオモチャを鳴らしたような、掠れた高い音だった。
ふと、左胸に違和感を感じた。触ろうと伸ばした手がベタ付いた液体にまみれる。
最後に立夏が知覚したのは、何故かゲームの効果音みたいな電子音だった。

立夏は崩れ落ち、地面と一体になった。

無謀な探検家

マシュの中の何かが切れた。

フランス兵とコミュニケーションを取ろうと接触し、結果怪しまれて武器を向けられたマシュ。

どうすればいいか相談しようとして、そこでやっと、近くに立夏がいないことに気が付いた。

「先輩…？マスター！」

後ろを振り向く。フランス兵の持つ灯火が、暗闇の中の地面を照らしている。しかし、彼女のマスター、藤丸立夏の姿は見えない。

まさか置いてきた!?

平静を失い、パニック気味にフランス兵に盾を振り下ろそうとした、その時だった。

■■■■■■■■■■■■ーーー!!!

辺りに雷鳴のような、獣の咆哮のような轟音が響いた。

あまりの音量に思わず体を硬直させる。雷でも落ちたのかとマシュは思ったが、それなら稲光が瞬き、視界は真っ白になっているハズ。しかし、以前変わらず視界が真っ暗のままだったので、どうやら雷ではないようだと考え直した。

なら、何の音だ？

「…よ、夜の魔女だ、夜の魔女が出たぞ！今すぐ撤退だ！」

マシュが轟音に意識を向けている間、フランス兵達は呆けた顔で棒立ちになっていたが、一人が気が付いたように大声を出すと、ガシャガシャと慌ただしく防具を揺らして砦があるらしい方向へ走り去っていった。叫び声の中には怪しい単語が混じっていたが、マシュにはそれを気にする余裕はなかった。

先輩が危ない。
「マスター?・マスター、どこですか!」
立夏を呼ぶ。はぐれたと言ってもそれほど離れたわけではない。無事なら自分の声は確かに聞こえて、返事ができるぐらいの距離のハズなのに、立夏は何も答えてくれない。頭を占める嫌な予感から目を背けて立夏を呼び続けた。
♪ー　♪ー♪ー　♪ー
唐突に電子音が聞こえた。疑問に思うこともなく、マシュはそれが聞こえた方向に駆け出した。
切れた何かは、再び繋がっていた。

顔が痛い。起き上がって顔を拭う。
目を開く。何も見えない。
目を擦ってもう一度見てみる。やっぱり何も見えない。

何度かそれを繰り返して、そういえば気を失ったんだったかと思い出した。
…
えっと。ちょっと意識がぼやぼやしてる。俺藤丸立夏。特異点になったフランスに来てて、夜だからなのか急に睡魔に襲われて、ええっと…
「…ター、マスター…!」
あ、マシュの声…あぁ、そうだ!・マシュが一人でフランスの人と話そうとして、それで慌てて追いかけようとしたせいでつまずいたんだった!きっとマシュ心配してるよな。言っても俺も暗くて不安だし、マシュを呼んで来てもらおう。
「おーい、マシューー!・ここ、ここだよーー!」
「マスター…先輩!・今行きます!」

藤丸立夏は気付いていない。自分が襲われたことも、自分の身に起

きた異変にも。
ポケットの中に入れっぱなしの人形の、頭が無くなっていることにも。